

327

690

農學博士玉利喜造著

內觀的人類進化說

東京

合資會社育英書院發兌

6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

始



農學博士玉利喜造著

內觀的人類進化說



東京  
合資  
會社育英書院發兌

大正  
4. 1. 16  
內交



凡例

一余は達因氏の著書は兼て多少研究せしも、本書に於ては邦人の讀者に便せんが爲め、特に田中理學士の翻譯せる「人類の由來」より採録せるもの尠なからず、而て動物の圖畫は主としてリチャードリデッカー氏の著書より採擇したり、茲に之れを記して著者譯者に謝せんと欲す。

一余は成丈け普通一般に理解し易からしむる様注意したるも、猶ほ専門學術に涉るものは止を得ず學語をその儘使用せり、然れども余は元來用語中に含有する意味の範圍充分かならざる間は、他の使用語には餘り頓着せず、唯々自ら可なりと信ぜし處のものを採用する方針なるが、之れ他の誤解を惹き起さんことを虞るゝを以てなり、若かも猶ほ邪氣の如く前著書に於ける病理の説明には適應するも、本書進化の刺戟たる場合には不都合を感ずるが如し、但し自ら採擇したる名稱は、その含蓄意味も範

圍も自ら定むることなれば、如何様にても差支なき筈なるも、猶ほ字義に拘泥して他の誤解を惹き起す虞あり、況んや他の用語をその儘使用することは余の今日の場合大に注意を要する處たり）

一余は靈氣を餘りに明白に又卑近に説明するを以て、一種異様に感ぜらるゝ人あるならん、之れ從來靈的經驗を遂げ得たりと稱する輩が、動もすれば神秘的に誇大に左も勿體らしく荒誕無稽の言を弄して、他を蠱惑する弊あるに鑑みて、斯くは説明したるが、一は又現に吾人體内にあるものを如何にも崇高玄幽にのみ説明して渴仰するに依り、斯くは卑近に説明したるなり、察するに靈的渴仰者よりは神靈を餘りに輕蔑するものとなし、又唯物的無神論者よりは、猶ほ或は無稽の言を發するものとせんも、余は不可思議を常理となし、神秘を發て之れを平凡化せしめんと、の企望を以て立つものなれば、その非難攻撃は期する處にして、毫も意とするに足らざるなり、乞ふ讀者之れを諒せよ。

# 内觀的人類進化説

## 目次

緒論	一
靈氣	三
靈氣の存在 <sup>四</sup>	靈氣は移動す <sup>六</sup>
神經質又は怯懦なり <sup>二</sup>	靈氣は治療的作用を成す <sup>三</sup>
性强盛なり <sup>一八</sup>	靈氣は習慣
邪氣	二〇
邪氣の二大種別 <sup>三</sup>	生理的邪氣 <sup>三</sup>
	病理的邪氣 <sup>三</sup>
	邪氣の移動 <sup>三</sup>
邪氣の通路 <sup>三</sup>	邪氣の移動は一の刺戟たり <sup>三</sup>
邪氣の刺戟と分泌	三六

邪氣と脂肪の集積 . . . . . 三  
 邪氣と粗毛(人類毛髪)の長生する理由 . . . . . 三  
 邪氣と一般哺乳動物の形態 . . . . . 五  
 神経系統の進化(靈氣の本體) . . . . . 八  
 人類頭腦の進化 . . . . . 九  
 心理性の進化 . . . . . 一九  
 餘論 . . . . . 三〇

目次終り

内観的人類進化説

自序

査爾斯達因チャールズ・ダーウィン氏生物進化の理法を闡明したる以來歐米學者の之れが研  
 究に従事してその完成に努むるもの甚だ多く、精は益々精微に入て生物  
 の妙機を發き、遂に此理を擴充して大は宇宙の進化を攻究して、造化の秘  
 密を窺ふに至れり、然れども顧みて吾人人類が如何なれば超然惟り進化  
 向上して萬物の靈長たるに至りしやの原因に至ては、猶ほ未だ漠然達因  
 氏當時と比して左程の進歩を見ざるが如し。

余曩に内観的研究の結果として、吾人人體内に靈氣邪氣の存在するこ  
 とを宣明し、主として邪氣病根の原理を論じて世に公けにしたりしが、此

二氣説の人生に關して切實無比の問題たるに拘はらず、世人の之れに注意せざるは、蓋し二氣説の眞理に合はざるが故か、抑も亦た余が研究立論の突飛なるに依由するか、余は已に邪氣の存在は各種方面よりその實例を擧げて反覆之を證明したりと雖も猶ほ未だ他の肯定を得能はざるを遺憾となし、今日一般に稱する題目たる進化説を捉へ來て、更にその不明の理を明かにし、以て余が研究の當否を問はんとは企てたるなり。

余の研究は固と内觀法に依りて直指その原因を自個體內に發見し、而して日常行はるる處の實例を擧げ來て之を證明するに依り、恰も直覺的に斷案を下して、之れを演繹法に依り論證すると同一方法なれば、今日の科學者が普通一般に採用する處の歸納法とは全く反對にして、或は獨斷的とも認められ、又事實を牽強附會するかの様にも見受けらるゝは、自ら

承認する處、此種研究には蓋し止を得ざる成行きたり。

然れども、余は内觀自證を以て満足するものにあらず、必らずや客觀的に、科學的に之れを證明することの必要を感じ、已に前著述に於ても此事を述べ置きしが、余の内觀法は所謂直覺にもあらず唯、敏捷なる神經に依り自個体内の感覺を以て經驗することなれば、普通一般が現に物を視又は感ずると同一なるものが、今少しく進みたるものと云ふに過ぎざるのみ、若かも人或は余を目して奇説を敢てするものとせん、然れども余に於ては曾て辨明せし如く、不可解を解し、不可思議を常理となし、神祕を發て之れを平凡化せしめんと志望を以て、此種研究に従ひたるものにして、眞理の發顯を熱望するの心情は、蓋し他に譲らざるを自白するものなり、達因氏自然淘汰等の影響を論じて最後に曰く、今迄歴擧したる諸方法

及吾人の未だ發見するを得ざる他の原因によつて、人類は吾人の状態にまで向上せしものなり云云、此書若し果してその所謂達氏の未知の原因を闡明したるものたらば幸甚之れに過ぎん焉。

大正三年十一月

著者誌

## 内觀的人類進化説

農學博士 玉利喜造 著

### 緒論

余は近刊の拙著「内觀的研究」を以て、吾人の體内に靈氣邪氣の存在することを發表し、而て其邪氣若し體内に停滯、若くは鬱積するときは、疾病を發する所以を明かにし、凡そ諸々の疾病なるもの、其原因約ね此の如きに過ぎざるべしとの旨を告白したり。然るに本論文は、其邪氣說中一種他の方面に進んで、研究したるものなるが、彼に在ては邪氣を以て疾病の原因となし、是に在ては人類が萬物の靈長と成りたる原因なりと推斷せんと欲す。其主旨相反する様なるも、已に前説に於ても、然れども余は更に

云はんと欲す、邪氣又は邪氣を發生する原蟲及菌も亦或程度に於て刺戟たるを以て、人を神經質たらしめ又神經を鋭敏たらしむるゆへ、一概に嫌惡すべきにあらず、或時代に或微蟲菌が人の體內に入て以來、或は人が一層向上發展したるやも知るべからざるなり。才子多病の如き即ち此の類にして、余は多病を以て才子たらしむるに至れりと云はんと欲す云々而して同書の二三八頁には「刺戟を以て萬物發動の淵源なり」と觀じたり。菌蟲の爲め發る所の病理的邪氣さへ、時に良效を認むる余に於ては、生理的邪氣の吾人に良結果を呈すべきを信ずるは無理ならざるなり。仍て余は余が内觀的に得たる所の實驗より推して、之を動物進化の實際に就て攻究するに自然の理法は大要其肯綮を得て違はざるものゝ如し。殊に靈氣の性質と邪氣の刺戟の如きは、本論文の骨子と成るべきものなれば、先づ靈氣邪氣の性質を説くの必要あり然るときは内觀的研究の如何なるものなるやをも、辨明すべきなれども、之れは他の著書に譲り、茲には

靈氣邪氣が一般動物の形態に及す實際上の關係を擧げて、終に余が進化説の斷案を試みんと欲す。

抑も人類の進化とは、畢竟人類が如何にして、今日の程度まで進化したるか、如何なる原因若くは理由ありて、人が他の動物に超越して進歩し、遂に萬物の靈長たる此最高位置に達したるか、その原因を討究せんとするにあるなり。勿論進化の意味は有形なる體質と、無形なる知力又は心理性即ち心身の發達とを含有するも、余は主としてその靈知腦力の發育せる由來、有様を説かんと試みるものなるが、之れさへ有形無形の二様に説明せざれば、到底その意を悉くすこと能はざるなり。茲に於ていよ／＼余が研究せる靈氣邪氣の性質に就き、一應その大要を述べ置くの必要を感ず。

## 靈氣



## 靈氣の存在

吾人の体内に一種の氣塊、若くは氣流あり、之れを靈氣と稱す。その物たるや唯々一種の神經がその存在若くは移動を感ずるのみにて、今日物理學上未だ名稱すべからざるものなり。蓋し神經が衰へ精神が一種鋭敏の状態に陥るときは、容易にその存在移動を感知せらるゝなり。普通の人にては之を感じ能はざるも、猶ほ或る機に觸れて感ずることなきにあらず、即ち突然物に驚きて背中若くは神經に「ズー」と感ずるが如きは即ち靈氣の感動若くは移動するときなり。寒冷の爲め戰慄又は肉の搖動するが如きも、靈氣の然らしむる作用にして、その搖動部には必ず靈氣存在すべし。蓋し神經質の人とは、此靈氣頻次に又は容易に出動する人にして、若し神經質に成りたるときは、正に靈氣或る性質を帯びて出動しつゝある時なり。或ヒステリー患者に於て、時に明瞭に氣塊の存在するを感じて此所にあり、彼所にありと云ふ、依て俗に之を「ヒステリー球」とも稱す。廻はり痛風、又は遊走性癩麻室斯と云へるもの、若

し漠然患部の轉移するものを指稱するならば、邪氣靈氣を混同して指稱すべきも、多くは靈氣に原因するならんと信ず。殊に神經痛種々の炎症は全く靈氣に原因するものと思はるゝなり。

人體に於ける此靈氣を、時に靈魂、心若くは精神とも指稱し、又心理學者が潜在意識、副意識と云ふも、蓋し之れを認めて斯くは稱したるものにして、余は之れ副にあらず、實にその原始又は意識の本源にして、或學者が宇宙の實在萬有の本體と稱するもの、是れならんと信ぜり。又或學者の五官以外の感覺を掌るものあるを唱ふるものあるが、蓋し余の靈氣を指したるものならん。血氣壯んにして神經强健なる間は、何等の感發らざるも、一朝衰るに於ては、此靈氣頻次に出動する故、神經質と成りて切に心靈問題等に注意し、宗教の必要等を感じ、又假令ひ然らずと云ふも、精神苦悶を感ずるに於ては、天を喚ひ神を念ず、所謂苦るしき時の神頼み之れなり。之れ各人の体内に此靈氣を固有し、陰に陽にその感動あるに依り、時

に自然に發動するなり。之れ種々の心靈問題や、哲理の唱道せらるゝ所以にして、茲に於て實在と云ひ、神と云ひ、佛と云ひ、天と云ひ、精力と云ふ、その名稱擧て數ふべからず。

**靈氣は移動す** 靈氣は常に體內を移動するものなるが、その動くや無意識、有意識の二様あり、無意識に動くは、即ち睡眠中にして、囁語、夢若くは熱睡より喚び起して、正氣に還らざる場合、惚氣トホケの如き之れを證して餘りあり、その正覺せる時と雖ども、平心靜に能く察するときは、自然に移動しつゝあるを感ず。余は心身共に非常に衰弱せる頃は、恰も蚤か小蟲の這ひ廻はるが如く明瞭に感じたりしが、今は身體充實して左程にもあらず。その有意識に動くとは、此靈氣の性質として非常に感動し易きものなれば、偶々意識界に是れと云ふ觀念發れば、靈氣は之に感じて動くなり。神經質非常に高まりたるときの如きは、その感非常に鋭敏なり。試に此所が痛いと云ふ念を發せば、靈氣は直にその所に來るなり。人の談話を

聞きても直に動くなり。此の如き状態に於ける人は最も深き修養あるにあらざれば、甚だ危険にして狂氣に陥り易し。心學者が心とはころころ何方へも轉動する意味なりと云へるも、畢竟此の如き性質のものより成るを以てなり。靈又は魂を球グマといへるも、意義同じ、之れ頻次靈氣の移動せるが爲め、正覺しつゝ猶ほ幾んと靈氣の性質を、その儘稟有する所の催眠術の遊睡状態に於けると同じ。催眠術の遊睡状態に陥たる場合は意識滅却して、その人は惟り靈氣の下に動きつゝある時なればなり。(無論深淺の度異れり)

右の如く靈氣は、意識の爲め移動してその所在を變轉するのみならず、又意識の爲めその性質をも變化す。即ち意識の感し又は感情に依て、靈氣の性質を異にすと云はるべし。例へば急變に際會しては急轉し、心靜かなれば靜かに動き、氣苦しき時は、之れに準じて靈氣狂轉するが如く、又一種特別の神通力を發するが如きは、皆な夫れの中樞神經に觸れた

るものにして、それは初め意識之れを念したるより、その特別の性質を發したるなり。然れども此變化は、靈氣意識の爲めに移動すと云へる性質あるを是認すれば、自ら明瞭なる解釋を得べし。

**靈氣は偏信の性あり** 既に前にも述べたるが如く、意識界に是れと云ふ意念、一び發ればその是れならざるべからざる觀念を切りに發さしむ。神經質即ち靈氣の性質に變ずれば、變ずる程偏信の性强盛と成る。強迫觀念の發動するも、此の如き性質あるに依る、蓋し始めは意識に依て動くと云ふも、その甚しきに至ては靈氣の爲め意識も却て動かされ、遂に進んでは「ヒステリー」狂氣とも成るなり。件氣偏信の實例は、前にも述べたる如く、意識滅却して惟り靈氣の下に動く所の催眠術の遊睡状態に陥りたる者の舉動を見て察すべきなり。即ち遊睡状態にある人に對て、君の膝上に火の粉落ちたりと云へば、周章しく火の粉を揉み消すが如き状態をなし、その袖に毛蟲這ひ廻はれりと云へば、頻りに毛蟲を逐ひ拂ふ状

をなす。此の如き状態は理性全く滅したるにあらざるも、意識滅却して惟り靈氣の跋扈せる時、若くは靈氣の力に多く支配さるる時なり。

縦令ひ遊睡状態に陥らざるも、毛蟲を非常に嫌ふ人なれば、正氣にても或は不安の状態を呈すべし、蓋し此嫌惡と云へる性質が、既に靈氣に由て出來たるものなれば、平常に於て靈氣の影響を感受しつゝあるなり。唯その甚しきに至らざるは、知性又は理性なる腦力の理解力に牽制せられて、穩靜なるのみ。吾人が有する心の成り立ち及び作用は概ね此の如し、其の詳細は他日靈氣説心靈問題を論ずる節に説明すべし。之れ即ち狐憑病者と同一状態なり、即ち狐憑も他の命令若くは暗示に依て、貉憑、馬憑とも成ること容易なりとは、從來醫書にも見ゆる處なり、是等の場合が靈氣の素性を遺憾なく發現したるものにして、此の如き性質を有する所の靈氣、吾人の體内に潜伏存在するゆへ、人の模倣性と云へるものも存在するなり。生物の妙機は茲にあり、此所理想を現實にし、無眞

の無にあらざ)を有たらしむる機微存するなり。余の靈氣を以て萬有の本源と觀ずるも、實に此の如き性質あるに依るなり。カメレオン、雨蛙の如き周圍の色に倣ふて、自然その皮膚の色を變ずるは、唯々靈氣が視神經を假りてその色に感じたるのみ斯くて積雪多き寒帶地方にある動物は、白皚々たる雪のみを見るに依り、終に白毛種産出するが如く、或は南洋に於て種々美麗なる珊瑚礁の間に生息する魚類は、種々艷麗なる彩色を帯び、又最も巧妙に擬装せる木の葉蝶や木皮に見擬ふ所の蛾等の出でたるは、即ち靈氣の此性質あるに依る。理想を實現し無を有たらしむるの妙用察すべきにあらずや、此一性質は進化學に於ては、動物の擬態、保護色、感應の遺傳、若くは心的遺傳、後天的遺傳を、教育學に於てはその可能性、人の模倣性を説明し、宗教に於ては信仰の結果又は他力信念一向專念の原理を闡明にし、催眠術に於ては直接此性質を利用するに外ならずと知るべし。此性質を成せるは一の習慣と云ふ原始性に外ならざるなり。即ち

習慣遂にその性をなして後には先天的のものたるに至る。

### 靈氣は神經質又は怯懦なり

靈氣は神經の直接本源なれば、神經

質たるは言を俟たず。抑も神經質とは物に感じ易しと云へると同意味なるが、前に述べたる偏信の性と云へるは、即ち物に感動するの較著なるを示したるものなり、之れを吾人に在て神經が感受する性質より評下すれば、靈氣は極めて不安怯懦の性質を稟有すと云ふべし、靈氣の神經質なりと云へるも之れに原く。蓋し刺戟に依て發育せし靈氣なるに、加ふるに意識の爲めに動くと云へる性質あり、依て被是を綜合して考ふるに、靈氣の此性質たるや畢竟生を欲すると云ふ動機に歸着するや疑を容れず、不安怯懦、神經質若くは有意、無意に動くと云ふも畢竟生を欲すと云へる稟性に原くなり、蓋し生物として此世界に生れ出でたる以來、殊に動物と成りたる以來、その生を欲すと云ふ意志は代々生涯を通じて絶へず、又最も強く希望され常に其命令即ち暗示を受け居ることなれば、少しにても生

命に危害ありと認めたる場合には、之を免かれんと働くなり、怯懦、神経質なるは以て察すべきなり。而て此性質は靈氣の存在する位置に依て差あること、前既に述べたるが如し、即ち體の内部にあるときは、怯懦の氣發生し易く、外部に在るときは否らざるも、然れども假令ひ外部に在るも、猶ほ刺戟を受けて移動するときには、神経質に陥り、又卑怯の氣生じ易し。神經病者の十中八九迄は、恐怖心を現はすを以て知るべきなり、人の神経質に成りたるときは、必ず此靈氣の動くときなり、此靈氣沈着すれば、其の人も沈着す、冷水浴、深呼吸が膽力の修養に可なりと云へるは、即ち冷水浴、深呼吸の爲め、此靈氣の輕忽なる出動を抑止するを以てなり。氣を臍下丹田に下すと云へる氣は、即ち此靈氣にして、修養上謂ふ所の養氣も、能く其靈氣を節制せんとするの意味に外ならざるなり。

道家にては臍下三寸(又は二寸五分)之れを氣海丹田と稱し、氣の安住する處と云ひ傳ふるが、靈氣此所に在る時を以て神經最も安穩なりとす。

仍て修驗者、武術者の如きは冷水浴、深呼吸を行ふて靈氣を此所に誘致するなり、之れを實際に試みるに、その神経質發りたるとき、深呼吸をなすときは、呼吸毎に靈氣移動して遂に氣海に收まるなり。(風邪氣味にて身體の顫動若くは戦くとき、深呼吸をなすときは、靈氣の移動明瞭にして、遂に氣海に來て茲に入り始めてより、凡そ五分間位を経て收り了るなり。終れば我が身今まで大暴風雨中にありたるものが、頓にその暴風雨の收まりたるが如き心地にて、洵に靜謐に歸するなり)。その收まるに數分の時間を要するを推しても、之れを氣流と認めたるは理由あるなり。

**靈氣は治療的作用を爲す** 意志の内、常に最も熾なるもの何なるやと云ふに、蓋し己が生命を欲し、又は安全にすと云ふ觀念、希望丈、最も深く且つ切なるは莫なかるべし。靈氣は意識的に又無意識的に此命令、即ち暗示を受けたるを以て、陰に陽に生命に都合好き様に働くなり、醫家が人敢て人のみに限らずの身體は自然に治癒する様に出來居ると云ふ

も、之れあるに原く。靈氣が意識に依て動くと言ふも、固と生を欲する趣意より發りたるもの、如し、而て其無意識の間又は睡眠中に動くが如きも、身體を強健ならしむる爲めにして、體の或部分に弱き處又は痛む所あれば本人たる人は知らざるも、此靈氣は能く承知して必らず其處に來て治癒を圖るなり。其有様を察するに該患部は少しく溫氣を感じ、新陳代謝機能昂まるが如し。擊劍柔道等にて打撲したる處には屢々來る故其傷めたる局部は、筋肉異常に發育するなり。體内に故障あれば亦來て其故障を除かんと圖るなり、故に余は初め之れを生氣と名けたり。邪氣の停滯せし場合には、逆行即ちその反對の方より靈氣來て之れが疏通を圖ることあり、靈氣の爲め治癒的作用として新陳代謝機能昂まると云へる事實を研究するに、靈氣の通過せる所には一種の分泌物生じて、此物がその部分の機能を催進するなり。機能衰ふれば來て催進するも活動する間は來らざるなり、少しく滯留してその分泌物出來れば永く同一局部に

留まること能はず、直に他に移動するなり、此の如く其効果を呈するの狀は、其局部々々の適當なる機能を催進するものにして、決して一樣ならず、精神治癒も右の如き性質を有する所の、靈氣の利用に外ならざるなり。血精又抗毒素を生ずる所以の理由も、此靈氣の作用に原くもの、如し。血精とは血液中にある無色透明の液を指稱す、然るに之れが抗毒素の效能を呈するに至るは、例令へば「ヂフテリア」の病菌を動物の體に注射して、その病に罹らしめ、其動物當初は病毒の爲め苦惱の狀を呈するも、數日の後には其病勢に抵抗し得て、自然健康の狀態に復するなり、此時此動物の血液を取りその無色透明の血精を分離す、即ち此の如くして得たる血精には「ヂフテリア」の病毒に打勝つべき抗毒素を含有するなり、種々の抗毒血精は皆な夫れくの病毒を動物に注射して製造したるものなり（例令へば狂犬病毒や大島琉球等にある匙蛇の毒に對する血精の如し）

余は何種の疾病に對しても、各々その抗毒素なるものは發生すべきも

のなりと信ず、斯くて其病毒に冒かされざる性質を帯びたるを、普通免疫質と云ふ、蜂の如きに度々螫さるゝときは、後には苦痛を感じず、又腫れもせざるなり、啻に微蟲微菌のみに對して免疫性と成るにあらざるなり、曾て日露戰役にて、臀部に小銃丸を受けたる一將校の馬斃死したるに依り、其彈丸を取出さんとて、其局部を解剖したるに、彈丸は淺く肉中に留まりたるが、能く之れを檢查するに、別に肉の彈丸を包みたるものありたりと云へり。結核の粒狀を成すも、結核菌の蕃殖を封鎖せんが爲め脂肪の如きもの(乾酪性と云へり)之れを粒狀に包被すること、銃丸に於けると同一なるにあらずや。之れ蓋し靈氣の作用なり、岡田某の行へる靜座法と云へる精神治療法を見るに、患者數十百人一堂に靜座して、岡田氏の指導に依り、半遊睡状態に成て首を盪ひ、肩を搖かし、手足を動かす等、種々人々に依て其動作に異なるものありて、實に奇妙奇態の動作を現す、但し中には唯々睡りたるまゝにて、些かも身體の動ざるものあれども、或ものは正座の

まゝ、頻りに體を動して前進するもあり。此の如く各人に依て動作の異なるは、如何なる理由に原くやと云ふに、各人の身體に故障を感じる局部、又は病狀異なるを以て、各々夫れを治癒するに適應せる動作を爲すに依るなり。而て其動作を爲さしむるは實に靈氣の作用なりと知るべし。靈氣は右の如く常に人生に善良の結果を呈する爲め働きつゝあるも、實際は時に不良の結果を致すことなきにあらず、即ち「ヒステリー」患者、發狂者の如きは其の顯著たるものにして、種々の神經痛や炎症の如きも、靈氣の爲め發したるものと察せらるなり、但し是等の場合と雖ども固と生を欲する趣意より發動したるもの、圖らずも不良結果を呈するに至りたるもの、如し。即ち「ヒステリー」の場合は身體の全部又は一部疲勞したるものあり、之れが恢復を圖らんが爲め、頻次に靈氣出動し、遂に神經質に陥る、炎症の如きは或一局部に邪氣停滯せしを疏通せんが爲め、靈氣の出懸けたるものが、容易に疏通せざるよりして、遂に炎症を發さしむるなり。

前にも靈氣の通過せし後は少く温氣を感じずと云ひたるが、永く同一ヶ所に停滯し、且つ閉塞堅固なるが爲め、靈氣強ひて之が疏通に努むる所あるより、遂に炎症に陥るものゝ如し、仍て余は此の如き場合に於ても、元來靈氣は善意を以て動きたるものが、圖らずも不良の結果を呈したるなりと信ず。

**靈氣は習慣性强盛なり** 之れ寧ろ宇宙の原始性ならん、此習慣性は物理学上の惰力なり、茲に力と云ふも實は無力自然その儘にして如何にも轉動し一び動かされてはその方向に動きつゝありて、他の之れを妨るにあらざれば、何時までも動くなり。故に實は無力なりと云ふ、原始性は蓋し此の如きものならん、前既に説明したる靈氣偏信の性ありと云へるも、此習慣性より發達したるものなるが如し、遺傳性も蓋し之れより進化したるものならん、此原始性甚だ強盛なりと云へば、則ち天地萬物には習慣性ありと云ふと同じかるべし。果して然らば有機無機、有生無生を問は

ず、宇宙萬有には皆なそれ〱固有又は特有の性質あり、之れを原理、眞理或は公則とも云ふ、物あれば則ありとは之れを云ふならん、客觀的に論ずれば、此性質は即ち原理若くは公則とも稱すべけれども、主觀的に評下せば之れ習慣なり、實に習慣は第二の天性なりと云ふ語ありて、二者の間に自ら差別ある様なれども、元來二者一たり、即ち是あるが故に宇宙の眞理存す、決して有生無生に差別あるにあらざるなり。無生物より生物を生じたるも之れあるに依り、生物が生を營むに至りしも習慣なり。故に余は之を宇宙の原始性なりと認めたり。余一び之を發見するや、宇宙萬有の發育成立する所以の理由、又はその所謂理由なるものゝ存する所以を了解し得たるやの感あり。凡そ原始時代に於て萬有の發育するには、その必然の理由存するにあらずして、偶然に發したるもの、二びし三びする間に、その然かせざるべからざるものと成りて、理由とも性質とも成るに至り、後には此の理と彼の理と若くは此性と彼性と相合して、その然らざる



べからざる理由、性質を有するに至りたるもの、如し。

前の諸説に就て深思熟考するとき、普通謂ふ所の我々人間の心、又は精神、意識なるもの、性質、及作用も亦た以て畧々諒解され得べきにあらずや。即ち我々を支配する所の心は、脳神経系統と、靈氣の二者と相合して働きつゝあるなり。此甲乙二者は人に依て多少あるのみならず、同一の人にして時と場合即ち或る感じ、刺戟に依て又増減多少あり、而て猶ほ甲は乙を動し乙又甲を動かすのみならず、靈氣の性質前既に述べたる如く、靈妙なるものなれば、心の靈妙不可思議なるは、推して知るべきなり。その發達の順序に就ては此書の目的なれば別に述ぶる所あるべし。

### 邪氣

邪氣は吾人の體内に斷へず發生して、腎臟、肺臟より排泄する以外の邪惡の氣を指稱す。其性質たるや決して同一ならざるも、形體は瓦斯體及

放射物體にして、化學性分は種々混和して、復雜のものたるや疑を容れず、蓋し發生の原因を異にし、又縱令ひ同一源より發するものも、靈氣又は神經作用の如何に依て、變化を來すべければなり。(牛乳の如きさへ搾乳の際その乳牛が感じつつある神經作用にてその性質を變ず)然れどもその大部分は炭酸瓦斯なりと推知するに難からず。

**邪氣の二大種別** 漢方醫は邪氣を種々に區別し、余も亦た茲に述るもの、外に外來の邪氣種々あるを知るも、余の病理說殊に本論文には關係渺きを以て余は内生の邪氣のみを取り、之れを(一)生理的邪氣(二)病理的邪氣の二種に別ちたり。

**生理的邪氣** は生活諸器關が營まるゝ間、即ち血液が循環しつゝ、神經が活動しつゝある間、それが爲めに發る所の邪氣にして、其性質一般に輕浮稀薄又普遍的なり。その大部分は炭酸瓦斯なるべきも、亦一層輕浮放射性のものあるならんと信ぜらるゝなり。故に邪氣にして生理的に

刺戟をなすものは、主に此種類に屬するが如し、從來炭酸瓦斯の皮膚全面より、排泄せらるゝと云ふもの此種邪氣にして、頭部又は上部に上昇して鼻孔、口腔、耳腔、眼瞼、後頭、頤より排泄せられ、殊に鼻孔よりは多く排泄せらるゝなり。

**病理的邪氣** 傳染病若くは流行病は多量の邪氣を發生し、爲めに發熱して甚だ險惡なるものあり。然れどもその發生量の多き割合には又その輕浮なる部分多きが如し。無論此種邪氣は病理的邪氣なるも、余が此種別内に於て論ぜんと欲するものは、是にあらずして平常人體内に發生する處の重鈍なる邪氣にして、之れが排泄に困難を感ずるより、動もすれば停滯鬱積して種々内科的疾物を發さしむるなり。原因は微生物殊に原蟲類の吾人々體內主に下肢の新陳代謝作用の盛んならざる部分に生息して發生するが如し、而て其性質たるや第一種よりは重鈍にして移動緩漫に動もすれば鬱滯して疾病を發すなり、故に今日の醫家時に毒素

と唱ふるは蓋し此種にして、その成分は炭酸瓦斯も混和するあらんも殊に雜駁のものなるが如し。はすする微菌

**邪氣の移動** 邪氣殊に病的邪氣は體內に停滯せしむべからず、停滯鬱積すれば疾病を生ず、故に邪氣は適宜體外に排泄せざるべからず、此排泄せんとする時を指して余は移動と云ふ、而て此體外排泄は皮膚の全面より發るも、邪氣は常に上へくと移動し、頭部及その諸竅殊に鼻孔より多く行はるゝなり。

**邪氣の通路** 邪氣の移動通過する跡につき察するに、第一種の邪氣は全體に擴布して上昇するも、第二種の邪氣は一條の經路ありて上昇するが如し、然れども此經路も亦た二三日の後には他に轉移するも、必らずしも血管淋巴管の如きを經由するに限らざるが如し。

**邪氣の移動は一の刺戟なり** 邪氣の移動は一種の刺戟たるや明かにして、其神經痛、頭痛、痲痺、痲痺、痲痺、痲痺の如き苦痛も之れに原くなるが、余は第

一種邪氣が各種の腺を刺戟して、其特別なる腺液を分泌せしむるものなるを信ず、即ち頭部に在ては涙液、唾液若くは粘液の如き之れなり、蓋し深呼吸法、欠伸をなして涙の出る理由は、邪氣の上昇移動してその涙腺を刺戟する爲めにして、大笑して涙の出るも、笑の爲め腹内の邪氣を驅て、上昇せしむる所以なりと知るべし。

余が吾人の體内に靈氣、邪氣の存在するを發見したるは、即ち内觀法に依りたるものにして、一種鋭敏なる神經を此種研究に集法したる結果なるが、之れ亦た靈氣の性質研究上、その此の如くならざるべからざるを得得したるものなり、邪氣の體内移動を感知するが如きは、最も容易にして且つ確實なるも、今日他が余と同様に感知せざるを以て、種々の方面よりその實例ともなるべきものを舉示したるなり。中に就き欠伸も邪氣の刺戟より發り、同時に涙の出るも邪氣の移動刺戟たるを證するものとなせり。

深呼吸をなしてその初めの數分間は、充分なる呼吸出來さるも二三分の後に至れば、胸腹、背の間に停滯せる邪氣、大方は排泄せらるゝを以て、胸腹自然に緩舒たるゆへ、充分に深く呼吸することを得べし、余に於ては、今此所より多く邪氣が排泄しつゝありと感じ、此所まで排泄したり、今は排泄し了りたりと感ぜらるなり。普通人は耳のしん／＼と引續きたる音は聽くに由なしとするも、一種「ぼと／＼」と耳鳴する人はあるならん、少くも醫師はその事あるを知諒せるならん、抑も何物が如何にして斯の如き音響を感ぜしむるやに付、疑念は挾まざるや、右は血液の流通する音なるや、余は液體の音なりとは到底聽き取ること能はず、縦令血液なりとするも何故に切れ／＼に此の如き音響を感ぜしむるや、平常は流通せざるものが何故に通ずるや、而て通じて何所に行くや、一々此の如き現象に注意して觀察するとき、縦令内觀法若くは特別なる直覺に據らざるも、邪氣の存在を首肯し得べきにあらずや、余は此

耳鳴は邪氣即ち瓦斯(小水泡)の耳腔の内壁近く沿ふて、上昇する音響なりと云ふ。

余は邪氣を以て疾病の原因のみとなすものにあらず、筋肉に弾力あること、又は力あることも或る程度までは、此邪氣即ち生理的邪氣にして、體温を保持し種々外來の刺戟をも、亦た緩和するに至るべしと信ず。而て其度を過れば却て疲勞を感じ、發熱をもなすなり。然れども余の茲に研究せんと欲するは此の如き問題にあらずして、現に邪氣の刺戟に依て發達せしならんと思はるゝ、動物形態の變化に在て存す。

### 邪氣の刺戟と分泌

邪氣の刺戟と云へる問題は、本論文の要旨に緊密の關係を有すれば、茲にその梗概を述べんに、各種の腺よりその特別なる液を分泌するにば、必ず何等かの刺戟ある筈なるが、その平常斷へず分泌する腺液は、概ね邪氣

殊に生理的邪氣の刺戟に因るを普通とするが如し。例令へば前已に述べたるが如く常に口中を潤ふす所の粘液、唾液又眼球を潤ふす所の涙液の如きも、この邪氣の刺戟に原くものにして、若し此刺戟の減少するか、若くは停止するときは、隨て腺液分泌の減少若くは停止を見るに至るべし。固とより唾液の食物に對する觀念より起りたる神經の刺戟、涙液の悲哀に原因する神經の刺戟の如く、直接邪氣の刺戟とも認め難きものありと雖も、猶ほ此の如き神經の刺戟は笑ひたるが爲め、却て涙の出ると同様の原理に依り、邪氣の上昇を催ふし、爲めに此上昇邪氣が、矢張涙腺を刺戟するものと思はるゝなり、兎も角も平常に此種の刺戟ありて、口中や眼球の濕潤を保つことは確實なるが如し、之を實際に就て説明せん、人の居眠りをなすとき、多く唾液(涎)を出し、熟睡中にはその分泌少きを實驗すべし、之れ將さに睡眠中に入らんとするとき、今まで活動して神經の緊張して邪氣を抑止せるもの、いよゝゝ疲れて神經緩るみ、茲に邪氣の多量を放出

するを以てなり。(邪氣の多量に排出せらるゝときは、心持能く睡眠に入るなり)而て此の如くして一旦多量の邪氣排出して、睡眠に入りたる後は、体内邪氣の量大に減じて、却て覺醒せるときよりは唾液を出すこと少きは、各自實驗する所なるべし。牛、馬若くは猫、犬類の疾病に罹りたるときは、その鼻端涸乾し、健康なるときは適宜濕潤を帯び居ること、能く人の知る所なり、此徴候は一面余の新病理説を説明するものにして、固と邪氣の停滯に原くものと知るべし。更に涙液に就て説明せんに、此現象益々較著なるものあり、例令へば終日活動して夕刻に至れば、疲勞を感ずべし、之れ體の各部に生理的邪氣の多量停滯せるに因る、續ひて欠伸をも頻發するに至るは、神經が已に邪氣の抑止に堪へずして、邪氣多く上昇するの徴にして、體の前部より上昇したる邪氣の胸喉の正中、并に喉頭や咽頭の邊に壓迫し來りたるより、之れを疏通排泄せしめんと、自然の作用なりと知るべし。その事實は深呼吸を行ひて、邪氣の上昇排泄を試るとき余の

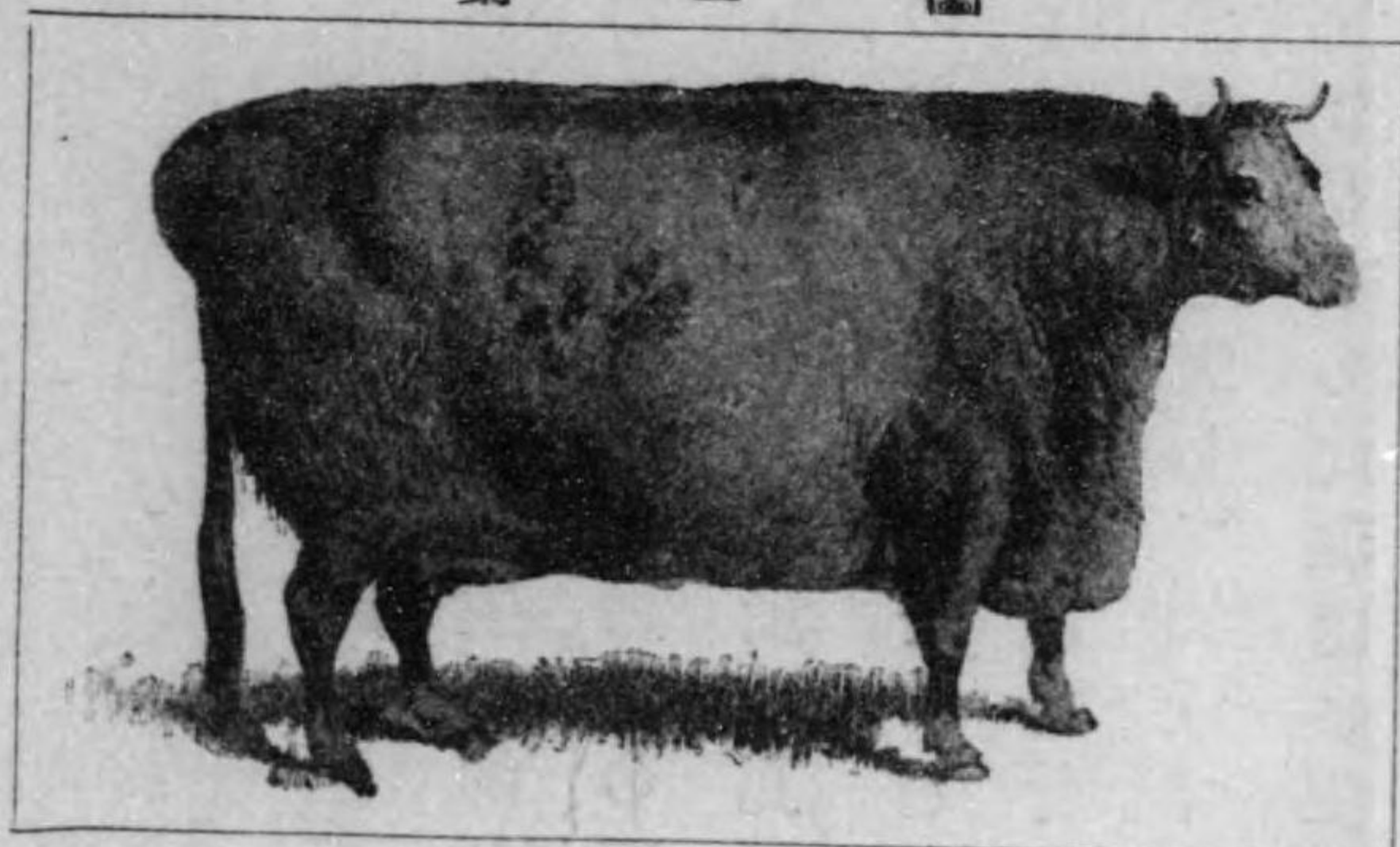
毎夜實驗する所にして、欠伸をなせば多量の涙液を分泌するなり、然るに漢法醫藥の「振り出し」風邪發汗劑の如き香竄性、揮發性の藥品を服用して後ち深呼吸を行ふときは、涙液の分泌一層盛んなり。之れ香氣發散して邪氣と共に、涙腺を刺戟すること一層甚しければなり。單に揮發性のものを服用して、之れが前頭部、頂門部より直に發散することは、余の身體非常に衰へたる頃明かに之れを感じたるが、今は大に充實したるゆへ否らず、前にも述べたるが如く、惟り悲哀に際してのみならず、笑ひの場合に於ても亦た涙液を出すことあるが、蓋し笑ふときは腹部内外の筋肉を動かし、胃腸も同時に動くに依り、此腹部に潜伏せる邪氣を驅て上昇せしむるを以てなり。その笑ふたるが爲め邪氣の上昇することは、笑ふて片腹の引き搦るによる、可笑的なるを「片腹痛し」と云ふを以て察すべきなり。即ち笑の爲め無理に邪氣の上昇するを以て引きつるなり、之れは又急劇に運動したる場合に遭遇する經驗に依て察せらるゝなり、余輩は此の如く

證據を證據立つべき、手数を掛けざるも内觀的に邪氣の上昇刺戟することとは、明確に知了し得るなり。一び此の理を了解するに於ては、今日新興の學説として唱道せられ、而て多大の興味を以て迎へられつゝ、ある所の内分泌説、即ち「ホルモン説」に於て能く舉示する大脳下垂體や、甲狀腺の分泌も同一の理由の下に於て、刺戟せることは推測するに難からざるなり。但し此種の刺戟に於ける分泌は、果して如何程迄行はるゝや、明言すること能はず、或は單に神經や靈氣の刺戟もあるべしと思はるゝも、唯茲には體の上部に於ける分泌腺に、不斷の分泌を促す刺戟としては、上昇の邪氣を以て唯一のものと云はんと欲す。此等の腺は頭部に在りて骨や神經系の發育に必要な物質を分泌するものなれば、此等の腺が刺戟を受けたる結果として、腦神經系統の發達を致すことは、又推測に難からざるなり。仍て先づ茲に邪氣の刺戟に原因せる發達と、思惟せらるゝ、實例とを舉示して、後ちに本論に入らんと欲す。

### 邪氣と脂肪の集積

余は生理的邪氣の停滯刺戟は、其所に脂肪を附生するものなりとの説を抱懷す。蓋し生理的邪氣は、主に脂肪の主要分たる炭酸瓦斯なるを以て、之れが刺戟は脂肪の變生と成ることは理當さに然るならんと思はるゝが、遊離せる此炭酸瓦斯が皆悉く血液中に入て肺臟に、輸致せらるゝものなるや、恐らくその停滯せる場所に於て、刺戟の爲め結締組織を生じ、細微血管に入て直に此所に脂肪を變化するものならんか、皮膚の厚硬にして其所を透して、排泄すること六ヶ敷き豚の如きは、脂肪を生じ易く、鯨の如きも蓋し此理由に依て皮下の脂肪饒多ならん、察するに冬期諸動物の脂肪を生じ易き理由は、寒冷の爲め皮膚の收縮して、生理的邪氣なる炭酸瓦斯の發散を抑制停滯せしむる結果なるが如し、故に農家が冬期を以て牛羊豚の如き屠畜の肥腴法フットニシツを行ふことなるが、此肥腴法には特別なる飼

料を給與するも、鳥獸の冬期脂肪を生じ易きことは、食物の多少や性質に依らざること、沍寒穴籠りの熊や、積雪の爲め食物少き寒國の野禽や、寒帶地方に棲息する各種動物の、脂肪多きに徴して察すべきなり。

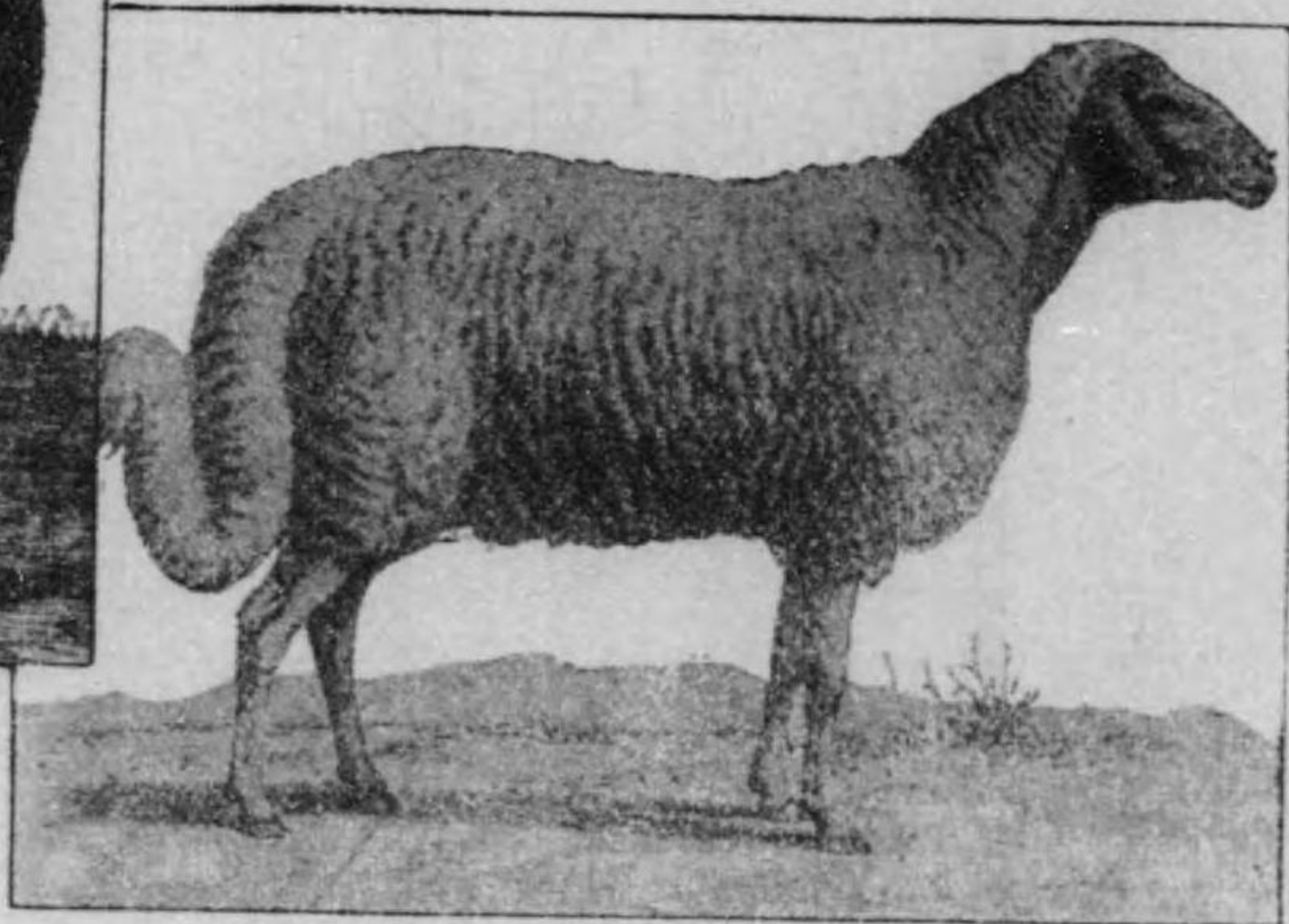


肥牛  
Fattened Cow

脂肪は生理的邪氣の停滯せる所に生じ易し、蓋し邪氣は上へくと上昇して、體の上部に集るものとせば、脂肪も亦た主として體の上部に集積するものなるが如し、即ち婦女子に在て脂肪の集積し易き所は、頂部、肩部、胸部、臀部、腓腸等の順序にして、男子に在ては左右臑骨の上部なりと云へり。屠畜に就て檢するに、脂肪の多く集積する所は、肩、背、腰の上部皮下(鞍下)と云へる所若くは内部に在ても、腹の上方即ち脊梁骨に



(イ) 緬羊脂肪臀種  
Tartarian-fat rumped Sheep  
(Ovis arkel steatopyga) from Dr. Keller.



(ロ) 緬羊脂肪尾種  
Fat tailed sheep (Ovis arkel platywa)

沿ふたる部分にあり、肉牛に在ては之れを葉脂 (leaf-fat) と云ふ。此の如く上方にあるの事實は、此論文に最も重大なる結論を生ずべきものと知るべし。即ち今此邪氣上行の理を推して前肢より上りたるは、肩甲骨の前後に集積し、後肢より上りたるは、臀部、尾根若くは尾に集積したるものと察せらるゝなり。肉牛種を能く肥映するときは、尾根の周圍兩側に脂肪の瘤塊

を生ず、俗に之れを Patches (瘤塊) と云ふ、最も肥へ悪き和牛さへ、神戸にて飼養するときは、多少此の瘤塊を生ずるなり。緬羊に脂肪腎種 (Fat-rumped) と稱へて、臀部に脂肪の集積する種類あり、第二圖の「イ」脂肪尾種 (Fat-tailed) と云へる種類 (第二圖「ロ」三四種ありて、是等の羊は脂肪塊とも云はるべき、力のなき重大の尾を垂下す、その大なるものに至ては、壹個二三十斤にも至る、即ち尾根に集積すべきものが尾に移入したるものなり。斯くて獸類は最後部の乳房最も能く乳汁を分泌し、牛羊の如き大乳房も、後肢又は股間に發育せるは、前陳脂肪の發生と同一理由を有するにあらずや、果して然らば直立せる人類や、猿類の乳房が胸邊に於て發育せる所以も、亦推知するに難からずや、即ち人類に於ては直立せるゆへ、下肢は勿論體軀の邪氣上昇して、肩胸の間に抑止され易く、若くは頭部に集積すべければなり。然れども人に於ては鼻、口等の諸竅や、粗毛部より發散し易きを以て、脂肪の集積多からずと雖ども、角力者の肥滿するは、稽古の際に於て、盛ん

に額を以て胸に當る (打つかる) ゆへ、その兩者の筋肉を硬化し爲めに生理的邪氣なる炭酸瓦斯の通過排泄を妨礙するにあらざるや、體の前部より上昇するものは前胸を通過し、背肩を沿ふて上るものは、前額を通過して多く鼻孔より排泄せらるゝを以てなり。余は茲に於て外國に於ける「ビールサルン」の主人が、常に非常に肥滿し居るの理由は、解し得べしと信ず。麥酒を飲んで肥滿せる状態は、日本に於ても已に「ビール」廣告畫にて察し得べし、但し此肥滿は強ち胸額に邪氣を抑止するの手段を採らざるも、その人爲的炭酸瓦斯の多量を抱和する所の「ビール」を、平常多量に飲用するに由るべく、老人身體の諸組織が脂肪に變生し易きは、炭酸瓦斯の排泄充分ならざるを以てなり。世間に深呼吸法は炭酸中毒なりとの説を唱ふるものありと云へり、然れども深呼吸は邪氣の排泄を行ふものなれば、その理は當らず、此法を充分に行へば、始は溫氣を感ずるも後には却て體溫の減却する様感ぜらるゝは、その理當さに然るべしと



信ず。

## 邪氣と粗毛(人類毛髮の長生する理由)

余は内觀的研究に於て、<sup>五頁</sup>(二)種の邪氣は鼻孔よりは勿論口腔、後頭部よりも排泄のことを説きたるが、猶ほ唇頤等粗毛の多く生じたる局部より、能く排泄するにあらずやと思はるゝなり。但し腋下や陰部の多く毛を生じたる所より、邪氣脱出の事は知る能はず、然れども下肢より上昇する所の邪氣を、腰又は攝護腺の邊にて抑へ、縦令ひ一部分なりとも此邊より排泄するにあらずやと思はるゝ節なきにあらず。(鼠蹊腺と腋窩腺が前記二粗毛部と關係するにあらずや)余は特に邪氣が涙腺を刺戟する外、鼻孔等の粘膜炎に粘液を分泌して濕潤を保つは、絶へず邪氣(殊に(一)種の排泄刺戟に依るならんと思惟するものなり)。云々と述べ置きしが、當時腋毛部陰毛部に於て未だ經驗なかりしは、無理ならざる次第にして、余の健

康が猶ほ未だ充分恢復せざりし爲め邪氣は容易に上昇して、未だ是等局部より排泄せざりしが如し、其後余の健康は日々恢復し、特に去る十一月下旬(大正元年)には之れが爲め痔疾の氣味も發り、攝護腺會陰部の邊充血して、突張るの感ありしが、確かに陰毛部邊に擴布せる神經の恢復せるを感じたることは、他の徵候を以て明瞭にせり。以來此邊より邪氣排泄のこと推知すべく、隨て其後は頭部に上昇する邪氣少きを感じ、その後腋下よりも排泄行はる様にも感じ、今は眉毛の所に於て感ぜざる迄なるも、之れは老人の眉毛長生するを見て、大方は推察するに難からず。蓋し老成しては神經の作用衰へ、是まで頸以下にて大方排泄したるものが、頭部に上昇し且つ頭部の神經も衰へる爲め、邪氣は耳腔等よりも漏泄し、爲めに「しんく」と引續きたる音響を生ずるに至りたるものにして、耳は斯の如くにして聾す(老衰して他器官の鈍ぶるも之れと同じ)と云ひたるが、老人は惟り眉毛のみならず、耳毛も伸長するもの往々に之れあり、之れ邪氣

の刺戟に依りたるものにして、余は老人の眉毛が長生する理由も、邪氣排泄の爲め刺戟せられたる結果ならんと信ず、稚兒の前頭部に黒毛の密生するも、此局部「おどりこ」と唱へて、頭蓋骨の未だ被はざる軟面部にて、邪氣は此部分より排泄さるゝに依り、その刺戟を受て斯くは密生す。此密生は出産當時には認めず、その「おどりこ」の軟かにして脈動を認むる期間に於て、他より著しく密なるを認むるなり。前説を反言すれば、粗毛の發生する部分は、即ち邪氣の排泄大に行はるゝ處なりと云はざるべからず、但し生理的邪氣は右の如く、粗毛の發育に可良なるも、病理的邪氣は之れに反して、毛根の組織を損傷して遂に脱毛をなす、即ち禿頭の人は病理的邪氣を多く發生する人々にして、之れを見ても邪氣の上昇すること明瞭なるが、犬の如きも多く病的邪氣を有するものは、先づ背や頭の上部に於て脱毛を始むるなり、但し脱毛せざるを以て、病理的邪氣を發生せざるものとは思惟すべからず。

獸類は體の上部に粗毛を生ずるもの多し、否らざれば、之れに代はるべき異常の發育をなせる局部を有す、而て皆な概ね體の上部にあり、馬族、野牛若くは獅子の鬣、駱駝の肉峯、尾毛又は尾全體の發育も、その一にして角牙の如きも亦た同一原因に歸せざるべからず、但し英國の重曳馬中にはシヤイアー種「クライスデル種」の如く、却て膝及飛關節以下に粗毛を生ずるものあり、是等は僅少の除外例にして、蓋し他に原因を有するものならん、然れどもかの山羊、鹿の類に喉下、胸及脅邊に粗毛の生ずるものあるは、人の胸邊に生ずるものと同一理由にして、全く邪氣の刺戟然らしむるものと、皮膚の緩きものとが之れを致したりと信ぜらるゝなり。前にも述べたる如く、胸は腹部を經由して上昇する邪氣の主要なる通路にして、蓋し此所よりその多量を排泄するゆへ、粗毛を生ずるものと察せらるゝなり。山羊、鹿の類にて却て喉下、胸下若くは腹の下面に於て粗毛を生ずるものあるが如きは、之れ蓋し此等部分の皮膚は、柔軟にして他は大に緊

張せる場合なるが如し、若し蔚りたる線條あらば、それは皮膚の緊張せると弛緩せるとの接合線なるべし。(猿猴類に於ても前例を見るべし)獅子の如く體の皮膚緊張固くして、頸部緩るみたるもの此の如く鬣を生ずるなり。體の各部殊に皮膚の一樣柔軟なるものは、一樣の毛を生ずるなり。ダールウキン氏も曾て一び痲衝を起したる跡の皮膚に、粗毛を生ずることを述べたるが、蓋しその局部は皮膚弱くなりて、邪氣の排泄割合に多きに依るならんか、靈氣は邪氣の停滯を疏通し、殊に頭部に於て然りとし、又腦貧血にて卒倒する場合の如きも、兼て鬱積せる邪氣を靈氣が先導して、開通せる場合に發るが如し、其甚しきに至ては、炎症までも起す次第なれば、腫物の跡は皮膚弱くして邪氣の漏れ易きは、その理あるが如し、ダ氏の所謂痴呆の多毛なるの理由も、亦皮膚の神經弱くして、邪氣の排泄大に行はる徴候にあらずや、其痴呆たるの理は後に述ぶる所あるべし。

以上述べたる理を以て、人類の毛髮の長生する所以を推せば、容易にそ

の解釋を得べく、而て又人類の皮膚に毛の欠乏せる理由をも、解し得らるべきにあらずや、余の説を以てすれば、人は直立し頭部最も上部に位するを以て、その上へくと上昇する性質ある所の邪氣は、全身のもの皆な頭部に集るを以て、人に於ては他動物よりは頭部多く刺戟を受る道理なるが故に、毛髮の發育佳良なる所以なり。而て又それ丈け相關的に身體に於て邪氣の刺戟少く、隨て無毛の結果を生ずるにあらずやと思はるゝなり。而て邪氣の停滯刺戟は或は脂肪の集積となり、又或時は毛髮の長生と成ると云ふ、去らば如何なる場合に如何にして、右の如き差別結果を生ずるやと云ふに、余の内觀法に依れば、之れ靈氣の作用にして、邪氣停滯して、身體に違和を生じ、その自然の生理に相反するが如き、結果を生ずるに至れば、靈氣來て之れが解舒を試るなり。縱令自身に於ては左程苦痛を感じざるも、靈氣は之を感じてその治癒的作用をなす(内觀的研究三三頁参照)に依り、脂肪の集積發らざるの理も、之れと同様の作用あるならんと

思はるなり。但し脂肪と成るべき物質が變じて毛髮を生ずと云ふにあらず、唯々之れが集積を疏通するのみ、斯くて頭部の上面皮膚より邪氣の排泄盛んに行はれ、始めは刺戟の爲めに毛髮長生するも、後には先天的に長生の粗毛部は、組織も粗なるが故に邪氣の排泄盛んに行はるなり。殊に鼻、耳、口等の諸竅も體の上部に位して、全身より上昇する所の邪氣を能く排泄するに依り、身體の下部よりは邪氣の排泄微弱なるを以て、遂に粗毛を失ふに至りしなり、尾の消失したるも蓋し同一理ならん。「ダ」氏も人類及類人猿が尾を消失せるは、直立或は半直立の姿勢を取る結果に歸したるも、その原因は内臓の重量の爲め、尾脊推骨内に通ずる血管委縮し、爲めに尾の發達を妨げたるにありと説けり。余は之れを非認するの反證を有せざるも、亦邪氣の刺戟如何は一の主要原因たらんと惟ふものなり。但し從來の醫説にも刺戟性多毛症とて、何等かの刺戟の爲め多く毛を生ずべきを唱へたり、發胞膏、水銀軟膏、その他藥液類壓迫等の形迹ある部位

に、毛生あるを唱ふるも、余は茲に邪氣の刺戟あるを主張せんと欲す、而して等しく刺戟と云ふも、余の刺戟と茲に述べたる刺戟性多毛の例とは、大に異なる所あるが如し、余は此の例を見て直に是刺戟が多毛の原因とは見ること能はず、余の説は發胞や水銀軟膏や壓迫等にて、その局部の皮膚神系を痛め、邪氣の排泄容易と成りその多く排泄する邪氣の刺戟が多く毛を生ぜしむるに至るなりと、毛生を胎兒毛被、童兒毛被、晩成期毛被の三期に別つも、余は尙ほ老衰期の毛被期を加へて茲に刺戟性と云へるものも、その性質之れに屬するならんと惟へり。「ダ」氏は人の皮膚無毛たるに至りしは、直立の姿勢を占むる前にあるならんと云ひたるも、余は先づ始め尾を消失し、毛は後に失ひたるものとして、敢て前説を主張せんと欲するものなり。

「ダルウキン」氏は動物及人類に於ける鬚毛、若くは毛髮の問題に關しては、その理由を見出すに苦みたるが如くなるが、若し茲に邪氣の刺戟が粗

毛を生ずるの原因たりとの理を解するに於ては、左程困難にもあらざりしが如し、依て茲に「ダ」氏の傑作「人類の由來」(理學士田中茂樹氏譯)に就き、その所説を掲て愚見を述べんと欲す。

「ダ」氏曰く<sup>六六頁</sup>獅子の牡に存する鬣は、其競争者たる牡獅子の攻撃に對し善き防禦器にして、其鬣は牡獅子の陥り易き危險物なり、蓋し「エー、スミス」氏の余に教ゆる處によれば、其諸雄は互に烈しく戦ひ其幼なる牡獅子は老成せるものに近づかざればなり云々、獅子と虎の鬪に其鬣によつて頭部頸部を傷けざりしも終に虎は獅子の腹を貫きて斃したり云々又曰く「海豹類の雄は互に烈しく戦ふものなり」とは人の能く知る處にして其一種「オタリア、ジエバタ」の牡は大形の鬣を有し其牝に存するものは小形なるか或は全く是を缺けり、喜望峯に住める狒々「シノセハルス、ポルカリウス」の牡は其牝に於けるよりも遙かに長鬣及大形の犬齒を有し其鬣は保護の用を爲すもの、如し、蓋し我が英國の動物園の監督に向ひ余の目的を

毫も告げずして猿類の内に敵の頸背を目懸けて互に攻撃するものあるや否を問ひたるにその答ふる處によれば上記の狒々の外斯の如き事なし云々又曰く<sup>六九頁</sup>「亞米利加水牛」ボス、アリカヌスの牡の有する廣大なる鬣は殆んど地面に達し、其牝に存する者よりも遙かに能く發達せるものにして是は其牡が互に烈しく戦ふ際保護の用をなすものなりと余は考へたり、然れども老練なる一獵者の「チャーヂカトン」氏の云へる處に依れば此説を確むるが如き事實に曾て遭遇したることなしと、牡馬は牝馬よりも厚くして多き鬣を有す而て余は數多の馬を取り扱へる調馬師及飼育者に問合せたるに是等の人皆一樣に答ふる處に依れば牡馬は必ず敵の頸の處にて敵を攫まん事を勤むと、然れども上記の事實を見て頸上の毛髪は防禦の用をなすの時是等の毛は此の用の爲め發生したりと云ふを得ざるべし、但し獅子の或場合にありては此目的の爲めに元來より發生したる者と云ふを得ざるが如し、余が「マツクネイル」氏に聞く處に據れば「セ

ルブス、エラフス〔鹿の一種〕の牡の喉部に存する長き毛は狩獵にて苦めらるゝ際大に保護の用をなすものなり蓋し、犬は普通に鹿の喉の處を攫まんと努むればなりと、然れども是等の毛は特に此目的の爲めに發達せるものとは考へられず、若し然らずとせば其幼者と牝とは同一の保護を受くべければなり云々始めは鬣を以て防禦器とせしもの、茲に至て此目的の爲めに元來發育せしやを疑ふに至れり、或は時に防禦の爲め應用せられしならん、然れども特にその目的の爲めに、發生したるにあらずと云へば、去らば如何なれば斯くも發達せしや、之れ余の將さに云はんと欲する所なり。又曰く獸類（三頁）の牡の頸部及眉部に存する毛は往々其牝に於ける者よりは遙かに多く發達せるを見るなり、其他是に附添すべき多くの例を擧るを得べし、是は戰鬪に際し往々牝に防禦の用となる事あり、然れども多くの場合に於て毛は此目的の爲めに特に發達せるものなるやは頗る疑はし、其背上僅に薄く且つ狭き毛總のある場合にありては上述の説

眞ならずと論定する事殆んど確實なるべし、蓋し斯の如き毛總は毫も保護の用をなさずして且つ背上の隆起は害を受け易き場所にあらざればなり、然れども斯の如き背部隆起或は毛總は往々其牝のみに存在し或は牝よりも牡に於て遙かに多く發達せり、二種の羚羊、トラゲラフス、スクリアツス及ホルタツクスビクタは其善き例たるべし、牡鹿及野生の牡は怒り或は恐嚇せしめらる時は其背上の冠を直立す、然れども此者は單に敵を恐れしめんが爲めに發達したるものとは信ずるを得ず、上記の「ホルタツクスビクタ」は喉部に黒毛より成れる大形の刷子狀物を有す而て是は牝よりも牡に於て遙かに發達せり、北亞米利加に産する「アンモトラグス、トラゲラフス」〔羊科の一種〕にありては其前脚には毛非常に發達し、殆んど其前脚を隠せり、其毛は頸部及脚の上半より生ずる者とす、然れども「パートルレット」氏の信ずる所によれば此毛は牝よりも牡に遙かに發達せるも牡に毫も用を爲さざる者の如しと云々茲に於ていよく鬣の自然淘汰

に關係なきを肯定せるなり。更に又曰く<sup>三六頁</sup>以上列擧の事實の如き雌雄によりて互に相違あることを見て吾人の結論するを得る所のものは何ぞ或山羊の牡の鬚或は牡牛の喉袋或は或羚羊の牡の背上にある毛冠は各其習性よりせば或用を爲す者なりとは主張するを得ざるべし、「ビセシア」屬の牡の有する廣大なる鬚及び猩々の牡の有する大なる鬚は其戰ふに際し其喉を保護するの用ありと云ふを得ん、蓋し我が英國の動物園の監督者の余に告る所によれば多くの猿類は攻撃するに當て敵の喉を目掛るものなりと然れども此頤鬚は頰鬚、口鬚其他顔面上の毛總と全く異なる用を爲さんが爲めに發達せる者なりとは云ふを得ず、而て是等の鬚は保護の用ありと思ふ人あらざるべし、然らば凡そ是等の毛或は皮膚より成れる附屬器は毫も目的なくして牡に於て種々の變化を現はすに至るや、此の如く目的なき者なるべしとするも是を拒む事を得ざるべし、「云々」遂に結論に於て「ダ」氏は左の如く云へり曰く<sup>三六頁</sup>余が自然界より得たる所に

よれば大に發達せる身體中の器官は曾て或時代に特別の目的の爲めに得たる事を信ぜざるを得ざるなり、牡の色、牝よりも強き羚羊類及顔面の毛美しく排列し且つ種々の彩色を帶べる猿類を見るに冠毛、及毛總は裝飾の爲め是を得たる者なるが如く余は斯の如き説を抱ける數人の博物學者を知れり、若し此説正當なりとせば是等の特質は雌雄淘汰に依て得られたる者或は少くとも此淘汰にて變化せられたる者なる事疑ふべからず、然れども此説を如何なる程度まで他の獸類に適用するを得るや、吾人之れを知らず「云々」僅かに猿類の彩色を帶べる冠毛、及毛總は裝飾の爲めにしてその趣意は雌雄淘汰に出るも之れを他獸に適用するの程度は、之れを知らずとて自ら狭き範圍に局限し居るもの、如し、余も是等器官が全く自然淘汰、雌雄淘汰以外のみにて、發育せりとの斷言は爲し能はざるも、余は毛髮は勿論眉毛、頤鬚、頰鬚、口鬚若くは胸毛より腋毛、陰毛、若くは動物の鬣尾毛、毛總等の粗毛皆な同一理由の下に於て發育せしものなり

となす、即ち邪氣の刺戟大なる所に粗毛生ずと云ふに外ならず、雌雄淘汰の如きは之れを利用して多少増減せしめたるのみと信ずるなり。

吾人人類の皮膚に毛無き事に關して、全頁「ダルウイン」氏曰く「人類は遠き昔曾て或る熱帶地に住したる爲め、終に毛を失ひたる者なるべきか、人類の毛を見るに男子の胸及顔面に存し、男女共に四肢の軀幹に關節する處にあるを見れば、人類は直立の姿勢を占むる前已にその毛を失ひたる者なるが如し、蓋し人類に於て今日最も多く毛の生ぜる部分はその未だ直立せずして這へるの時代に於ては太陽の熱を受る事最も少き部分なればなり」云々、男子の胸及顔面に毛の存するは、胸は邪氣の經路に當り、頤毛、口鬚の生ずる處は皮膚軟かにして、多く此處より邪氣を排泄し、又は邪氣多く排泄するが爲め、刺戟を受て粗毛發生するに至れりとなす。鳥類には肺臟なく、又は肺臟發達せざるを以て、體内の邪氣又は炭酸瓦斯は多く皮膚より發散す故に、その皮膚は俗に粟膚をなせるを鳥膚と云ふ、丈け毛孔

粗なり、而して此理由に依り、大なる羽毛も生ずる様なりたるにあらずや、又は大なる羽毛を生ずるに至りし丈、皮膚の炭酸瓦斯排泄盛なるに依り、自然鳥類に於ては肺臟發達せざりしにあらずや、他の獸類の胸喉の如き下面に粗毛を生ずるの理は、人類に於けると同一なると、皮膚の緩るき四肢の軀幹に關節する處に粗毛を生ずるは、淋巴の漏過腺、淋巴腺ありて、此處より更に多く邪氣を排泄する必要あるを以てなり。太陽の熱を受ること少き部分に毛の生ずることを唱ふるは、事實を轉倒したるものにして、次に説き出す断定こそ眞ならん、隨て人が直立せる前に毛を失ひたるべしとの説は、之れを信ずるに由なきなり、ダ氏續て曰く「頭上に存する毛髪も亦異例とすべく、人類の頭部は昔より今に至るまで最もよく太陽に曝露せる部分なるに拘はらず、頗る毛髪多きにあらずや、靈長類とは人類をも含める目なるが人類を除きて他の猿類を見るに多くは熱帶の諸地方に住み、然かも體上毛の頗る多くして一般にその上面殊に毛の多きは



これ人の毛のなきことの太陽の作用に基くとの想像に反する者にあらざして何ぞや云々惟り猿類のみならず、人も除外例とするを要せず、他の獸類も太陽に面したる方、即ち上面又は上方に粗毛多く、下面下方は之れに反するを常とす、之れ邪氣の上昇排泄あるを以てなり、ダ氏續て「ベルト」氏の言を引て曰く熱帯にありて人には毛なきこと頗る利にして毛なきが爲め扁虱類其他種々の寄生蟲に犯さるゝ事なし、若し此等の蟲類に犯されんか往々潰瘍を起す事あれば是等の患も亦毛なきが爲めに免るる事を得る者なりと、然れども人類に毛あるの際は斯の如き禍害あるを以て自然淘汰によりて終にその全身毛なき者なるや疑はざるべからず、何んとなれば余の知る熱帯の猿類は凡て斯くの如きより生ずる不利を防ぐの手段を一も有たざればなり、余の考ふる處によれば男子及女子（先づ毛を失ひたるは女子ならん）はその身體を美ならしめんが爲め毛を失ふに至る者なるべし、これは後雌雄淘汰を論ずるの時に於て詳説すべし

し（既に前掲す）若し然りとせば人類が毛髮の點に於て他の靈長類よりも著しく異なるも亦怪むに足らず、何んとなれば雌雄淘汰より得たる特質は極めて近縁の動物の特質よりも頗る異なる事往々あればなり、云々遂に人の毛の有無を以て雌雄淘汰に歸せり、更に「ワレース」氏の言を引て曰く「世界各地の土人は其無毛の背及肩に或僅微の遮蔽物を置きて是等の部分を保護する事に努むと、實に人類の皮膚の無毛を以て人類に直接或利益ありと云ふ者なかるべし、此故に人類の身體は自然淘汰によつて其毛を消失せしめられたるにあらず、其他前章に述べたる如く人類身體の無毛は氣候の直接影響にありとの證據なく將た相關發達の結果なりとの證據も存在せず、云々、雌雄淘汰に付ては可否を云ふこと能はず、而も其相關發達の結果にもあらざるべしと説くも、余は皮膚に毛なきは頭部に長毛を有するに至りし相關的結果なりと云はんと欲す、」ダ氏又曰く「身體に毛の存在せざるは或程度迄第二次雌雄淘汰の特質なり蓋し世界各

地に於ける女子は男子よりも毛少なければなり、此故に身體の無毛は雌雄淘汰によつて得たる者なりと相像するは強ち理なき事にあらず云々女子の男子より毛少きは事實なるが然れども女子は男子より相關的に毛髮美なり、男子の毛髮が女子に比較し生長せざるは、他の諸部に粗毛を相關的に生ずる結果ならずや、去らば何故に然るや、粗毛生ずるゆへに毛髮短きや、將た又毛髮短き理由存在するが故に粗毛生ずるや、余はその後者を採らんと欲す、又曰く二〇五頁類人猿類の或種類の牝は前章に述べたるが如く其身體の下面の毛その牡より稍々少し、而して是等の種類を見れば身體裸出無毛に至らんとする初歩と思はる、者を視ふを得べし、此の如く無毛の完成する事の雌雄淘汰によるは夫の「ニュージールランド」に於ける「毛男には妻なし」と云ふ諺を注意せざるべからず云々即ち男の多毛者は蕃殖せざるべしとの意味なるか、或は多毛者は長命ならずと云へると同じきや、又曰く二〇六頁夫の痴呆は往々頗る多毛にして其他痴呆は人類以下の動

物の有する他の特質を復歸によつて有せんとするの傾向ある事は前既に述べたり云々茲には多毛なるは祖先復歸の遺傳性に出たるを説き、その他の性質も即ち神經の靈能なる作用も、復歸して爲めに痴呆たるを暗に説きたるもの、如し、然らば神經も普通人間の如く鋭敏ならざるを云ふものにあらずや、然れども余は人類の無毛たる所以は、神經の鋭敏なりし結果なりと云ふものにあらず、續て曰く然れども遺傳の法則は頗る復雜にして其作用は殆んど吾人は理解するを得ず云々實に然り遺傳の法則は甚だ復雜にして、吾人窺ひ知る能はず、近年メンデル氏の法則に就ては、學者の信ずるものありて一面の理由ありとするも、容易に首肯し能はず、何んとなれば余に於ては常に移動變化する所の靈氣が、影響を及すものありと信じ居るを以てなり、兎も角も猿類に於ては、その無毛部は雌雄淘汰に由來することは是認するに足るものとし、其他人種に依て鬚に對する好惡あれば、爲めに遺傳に依て遂に人爲的にその多少有無の差別

を生ずるに至らんと云へり。要するに之れ雌雄淘汰にして亦た然るべき理由存するならんと思へるも、然れども終に其最末に至て「頭髮トウモウは今日種々の人種に見る如く、頗る長大に發達せるものなるが、その此の如く發達せる経路を判斷するは頗る困難なり」云々その然る所以の理は知り能はざるを告白せり、余は即ち之れを邪氣の刺戟に歸せんとすること前に縷述したるが如し。

### 邪氣と一般哺乳動物の形態

邪氣の排泄は刺戟となり、此排戟は動物に一種特異の形態を發育すべしとの考察を以て、先づ體格巨大にして、皮膚の硬厚なるが爲め、その表面より邪氣の排泄困難なるべしと思はるゝ處の象は如何にやと云ふに、此獸は後肢低く前肢高きを以て、上行の性質ある邪氣は主として鼻口の間より排泄せざるべからざるゆえ、此部分非常に長くして、巨大の體軀内に

生せし大量の邪氣を泄マすに充分なる準備あり。而て猶斷へず生長する處の大牙を有す。豚も厚皮なるがその皮膚面より排泄不充分なる結果として、皮下に脂肪集積し易く、その鼻口より排泄すべき面積は、口端の長きと一種特別に擴張せる鼻端が充分に證據立つと信ず、若し鼻短きものあらば、そは小種の最も肥腴し易き種類なり、豚の無意識にブー／＼と云へるは、その皮膚厚く邪氣の排泄六ヶ敷くして、喉頭邊に邪氣突出する時と察せらるゝなり、人の臨終前に「さくり」シヤイネストツク型呼吸の發る所以は、畢竟神經已に衰へて排泄の力なき爲め、停滯せる邪氣茲に突出するものと察せらる、余今猶ほ稀れには之を経験し、二三年前には或一局部の皮膚よりも之れに類せる感じありし、その最も注意すべきは河馬ヒッポポタムス (Hippopotamus) (第三十二圖、一同二)なり、此獸の體は常に水中に没入して、首殊に口端と眼とを水面上に出し居るを以て、此部分最も上部に位して甚だ發育せり、我が南海に在る儒艮 (Dugong) 又は海牛 (Sirenia manatus) (第三十六

圖参照も同様水面上に頭部のみを出して遊泳するゆへ、口端大にして能く發育せり、之れに反して蝙蝠は手足を以て上より倒まに懸垂し、頭部は常に下方にあるが故に、顔面殊に小にして、上方にある處の體の後部は稍大なり、第十一圖殊に懸倒してその最上方に位せる手足は異常に發達して、手の指間の薄膜を以て翼と爲すに至るにあらずや、此二者は余の立論上最も顯著の對照なるが、之れを推して他の獸類を觀察するに、大體上之れに準ずるが如し。但し蝙蝠にも種類多し、その顔面の皮及耳の大に發育せしものあれども、一二種の外は何れも肥滿重厚と云はるべき相貌はなくして、脂肪と角質に缺乏せるもの、如し。

余は上掲の舉例を更に進めて、各種の獸類が如何程迄余の立論の大趣意即ち邪氣の上昇せる刺戟が脂肪や毛や骨角の發生に關係を有するかと云へる立論に、適合すべきやを説明せんと欲す。先づ茲に一言すべきは、余は各種の形態が、各々その自體より發る處の邪氣の刺戟、即ち自發的

第三圖



(イ) 熊の骨格

(ロ) 駱駝の骨格

の原因に依て出來せりと云ふも、之れ大體上の議論にして、唯一の原因と云ふにはあらず、その他にも自然淘汰、雌雄淘汰その他未知の原因もあり、彼是相綜錯するものありと信じ居るものなれば、茲に舉示する處のものは、その一班に過ぎざるなり、而て余の研究したる要點は或獸類全體の形態并に毛角等の判断し易き外觀に就き、主として説明するものなるも、必らずや内部器官迄變化を受るものなるや明かなり。例へば骨格殊に脊梁骨の棘狀突起は、左右肩甲骨の間に於て最も長く生ずること、牛馬に於けるが如きもの普通なれども、肩低くして背中の方高き獸類に於ては、却てその高き處に於て能く長生し、第二圖、イ、ロ、否らざれ

ば又肋骨の多き種類なるが如き觀ありて、上へくと上昇する處の邪氣の刺戟に原因して、然るべきにあらずやと察せらるるものあり。然れど

猩々  
Orang-outang

も余は茲に唯々その外觀のみに就て、觀察を下さんと欲す。

類。人。猿。類。は半直立の姿勢にして尾既に

消失するも、皮膚の毛は多し、殊に猩々。Orangの毛深くその肩に於て長きは、追て完全なる直立を遂げたる場合には、

第 四 圖  
(イ)



(ロ)



第 五 圖



(イ) Humboldt's woolly monkey (Yago thrix) (ロ) The red faced spider monkey

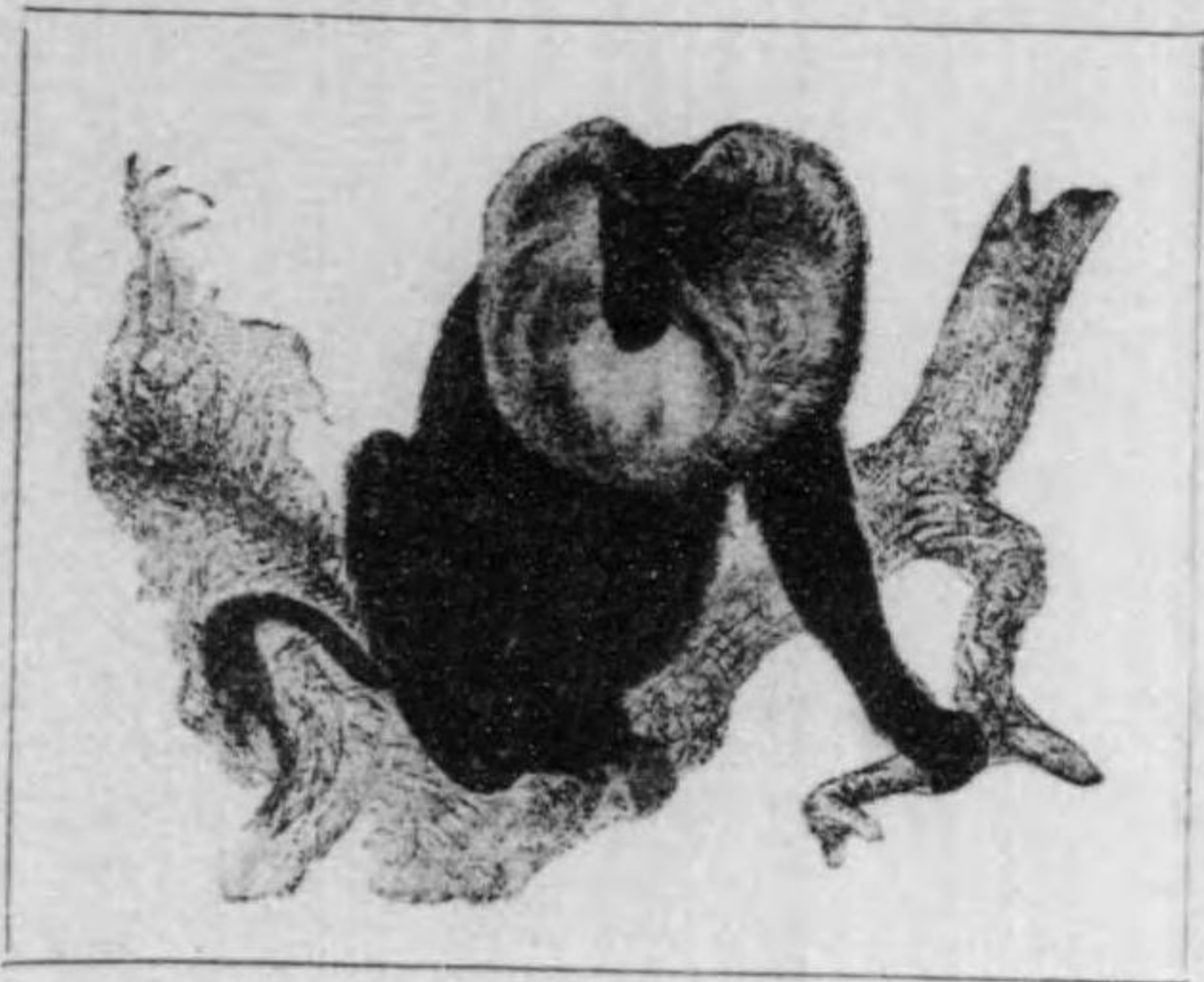
兔猿の一種

蜘蛛猿の一種

尾卷猿 Cebidae monkey

此長毛は頭部に移るならんとの相像を起さしむるなり。(圖解第四)以下圖解の二字を省略す(但し粗毛を生ずる皮膚は、その裸出のものより比較的柔軟なることは、前既に述べたるが如し、而て他の猿類に於ては概ね尾を有し、或は此尾甚だ長きこと、尾長猿 (Red monkey) の如きあり、或は此尾に力ありて樹枝等に捲纏して手に代ゆるが如き尾卷猿 (Cebidae monkey) の如きあり、(第五圖)大凡そ歩動の際に於ける體の姿勢に依て、尾の長短有無あるが如し、即ち常に直立若くは半直立のもの無尾にして、夫れより四つ這と成るに隨ひ、尾長生し後肢長く又は歩

第六圖



大 狒 々  
The negro monkey (Semno-pithecus maurus)

on-key (Semno-Pithecus maurus) (第  
六圖)イボザル The Black colob  
(colobus satanas) (第七圖殊にア  
ラビヤ狒々 The Arabian Baboon  
(Cynocephalus hamadryas) (第八圖)

第七圖



狒 々  
The black colob (colobus satanas)

動の際、後部高きもの尾長大にして力ある  
が如し、猿類の冠毛及毛總形状種々ありて、  
裝飾用なることは前既に「ダルウイン」氏の  
説を掲げたるが中に就き大狒々「The negro m

第八圖



アラビヤ狒々  
The arabian baboon (Cynocephalus hamadryas)

ropithecus gelada) (第一〇圖)と名  
くる狒々なり、髮毛、鬣は共に  
甚だ長く、體の皮膚は緊張の  
觀あり、此點に於ては前種稍  
同じ。要するに皮膚比較的

邪氣と一般哺乳動物の形態

第九圖



獅子尾猿  
The lion-tailed monkey  
(marcasus silenus)

の如きは、頭部の毛長くして髮を被  
ふるが如きも、全體毛の長き種類な  
り。獅子尾猿 The lion-tailed monkey  
(marcasus silenus) (第九圖)は名の如く  
その尾獅子に似て、毛總をなし頭頸  
には長毛あれども、その最も獅子に  
似たるは獅狒 The gelada Baboon (The-

一方に緻密緊張し、一方柔軟若くは弛緩する處あれば、茲に粗毛生ずるな

六四

第十圖

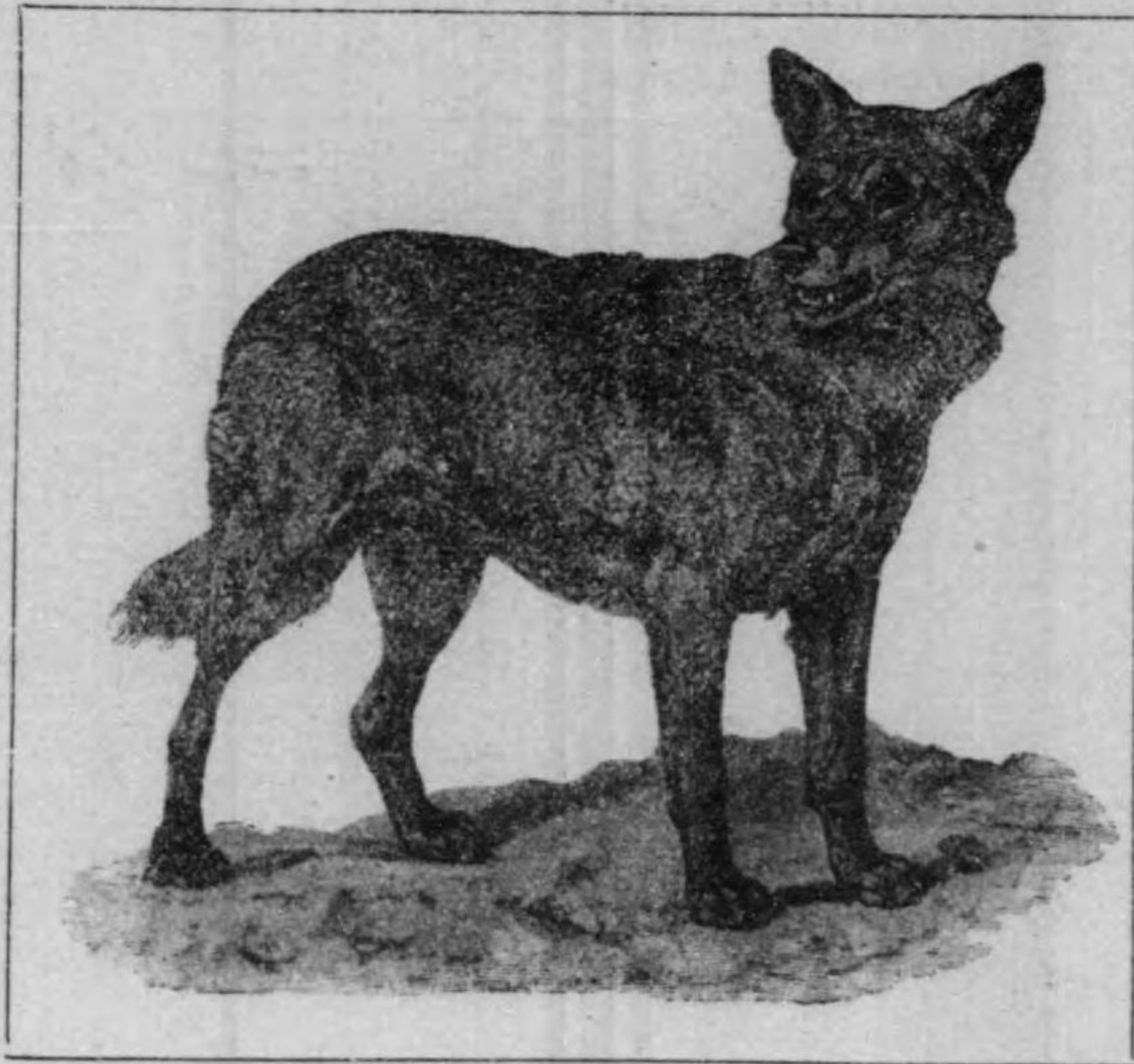


獅 狒  
The gelada baboon (Theropithecus gelada)

類の無角なるは、皮膚全體より邪氣の排泄甚だ能く行はるものと察せられたり。狐、狸の如きは尾に於て、影響を受けたるを推知するに難からず、

り、即ち此所に邪氣の排泄大に行はれて粗毛發生するなり。獅子の如き鬣を有するものの類なり、而て虎、猫その他體の全部柔軟にして皮膚薄く皮下脂肪の集積なき獸類に至ては、體の先端たる鼻口等に於ける、邪氣排泄に關せる特別注意すべき形狀を有せず、而し余も亦全體一樣にして、猶且つ是等獸

第十一圖



狼  
The wolf (canis lupus)

但し、犬、狐の如きは體の上部たる脊梁骨に沿ふて、粗毛を生ずることは認

むるに難からず、狼 (The wolf/Canis lupus) (第十一圖)に於て殊に然りとす、但し犬は種類甚だ多ければ、一樣ならず、蝙蝠に就ては既に述べたるが、種類甚だ多ければ頭部皆な前述べたる如く萎縮せるにあらず、蓋し彼等の習慣も亦た常に頭を下にして、足にて懸垂するにあらず、時に手にて垂下し、頭を上向きとす

ることあり、又下面を這ひ廻ることもあれば、頭部の萎縮せざるものあるは當然なるべし、その顔面の小なる割合には、鼻端廣く鈍頭にして腺より

邪氣と一般哺乳動物の形態

六五

成れる隆起は能く發達して、種々の形を成せり、就中管鼻蝙蝠 The Tube-nosed

Bat (Hesperia) (第十二圖の(イ)と云へる奇

態なる種類あり此種は口端餘りに短

くして、發育せざるにより鼻孔よりの

排泄不良なるを以て、特に鼻孔丈け管

状をなして發達したるもの、如し。

又鼻端恰も花瓣の如き形狀を以て、發

育せる花鼻蝙蝠 (The flower-nosed bat) (第

十二圖の(ロ)も此類なり、兎も角も骨質

の缺乏は察し得らるゝなり。但し豚

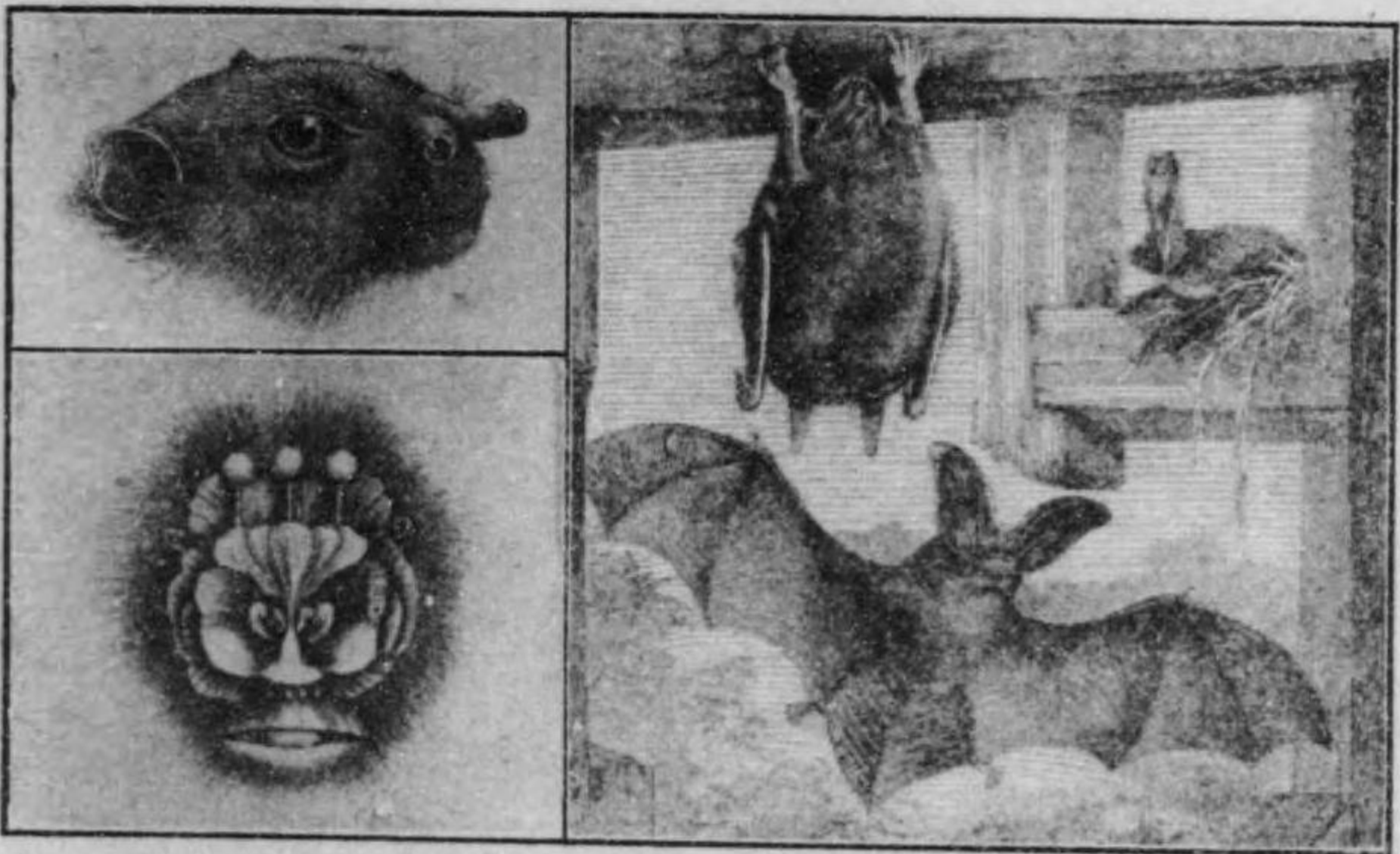
鼻の如くその外面廣がりて、此部より

邪氣を排泄すべきものなるや斯の如

き理由よりして耳朶面より排泄行はるゝゆへ耳朶大に發達せしならん

第十二

(イ) 管鼻蝙蝠の顔面  
Head of tube-nosed fruit-bat



(ロ) 花鼻蝙蝠の顔面  
Head of flower-nosed bat.

(ハ) 長耳蝙蝠  
The long-eared bat (Plecotus auritus)

か、長耳蝙蝠 (The long-eared bat) (第十二圖(ハ)も此例なり之れを外にして耳

朶の非常に發達するものあるの理由は之れを説明するに由なし、然れど

も手足の孰れかにて懸垂し、即ち手足が常に上部にあるよりして、此手足

異常なる發育をなして、手の指骨甚だ長くその間に膜狀の翼をなせり、此

翼に神經克く分布して觸感鋭敏なり、即ち手の指が最も發育せるが、之れ

休息せる時も、飛ぶ時も常に上位にあるを以て斯くは發達したるならん、

或は足にて懸垂する方多からんも、之れ休息せる時にして、邪氣は運動し

て是迄鬱滯せるものも爲めに移動上昇し、又新に發生することなれば、活

動時の姿勢を察すること肝要なるが如し「カンガロ」もその一にして、此

獸は前肢非常に短く、後肢非常に長くして、その歩動するや幾んど後肢に

て飛ぶが如き狀をなす、故に此獸休息せる時は常に佇立するも、その頭部

は割合に小形にして、後部發育し尾も肥厚にして大なり、熊の類は毛深く

して、猶且つ脂肪集積し易し、此の如く兩様を兼ねるものは、寒國の動物に



多くして全く寒氣防衛の爲め、自然發達したるもの、如し、即ち外來寒威の酷烈なることは、自體内部に於て生理的に發る處の關係よりは、形態に影響を及ぼすもの大なりと察せらるゝなり。海象(Wolrus)海豹(Otaria)臘肭獸(Seals)の類は、陸上獸類に比すれば、四肢の操作輕易なれば、邪氣の發生も少量なるべく、而てその發生したる邪氣は、排泄するに困難ならん、その鼻口を檢するに充分に發達せりとは云ふべからず、仍て此等の獸類は皮下脂肪の集積し易き種類なり。鯨に至つては一層甚し、此獸の皮は黒く厚き上皮に變じたるを以て皮膚よりの排泄を缺ぎ、殊に全身海中に遊泳し鼻孔は體の大なるに比して、甚だ小なれば、邪氣の全部は脂肪に變ずるの觀ありて、その肉甚だ脂肪に饒む。例令へば背美鯨(Balaena Japonica)に於ては皮と云へる白色の脂肪肉は、厚きは壹尺三寸薄きも六寸許りにして、その總體量を五千貫目とすれば、赤肉と白身即ち皮とは幾んど等分にして、二千五百貫づゝ位なり、尤も鰮鯨(Balaenoptere Arctica)の如きは赤肉千八百貫

第十三圖



大食蟻

Ant bear (Myrme-cophaga jubata)

の獸類には、大食蟻 The

ant bear (Myrme-cophaga

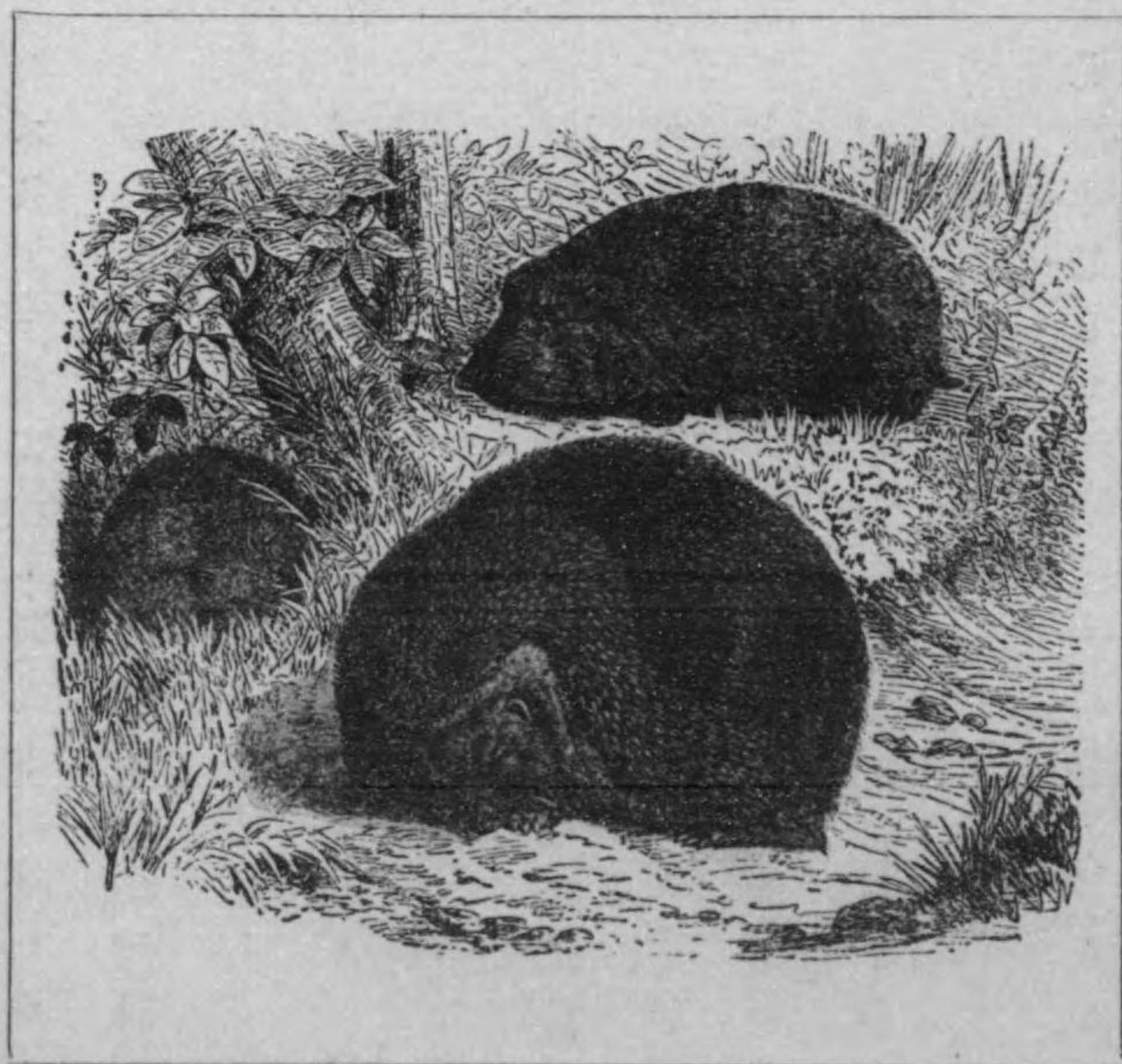
jubata) (第十三圖)ハリネ

ズミ Hedgehog (Erinaceus

Europoens) (第十四圖)チネ

邪氣と一般哺乳動物の形態

第十四圖



ハリネズミ

Hedgehog (Erinaceus Europoens)

目皮五百貫目即ち脂肪分は幾んど三分一に過ぎざるも、他の種類に於ては大抵等分なり、猶ほ肉食

第十五圖

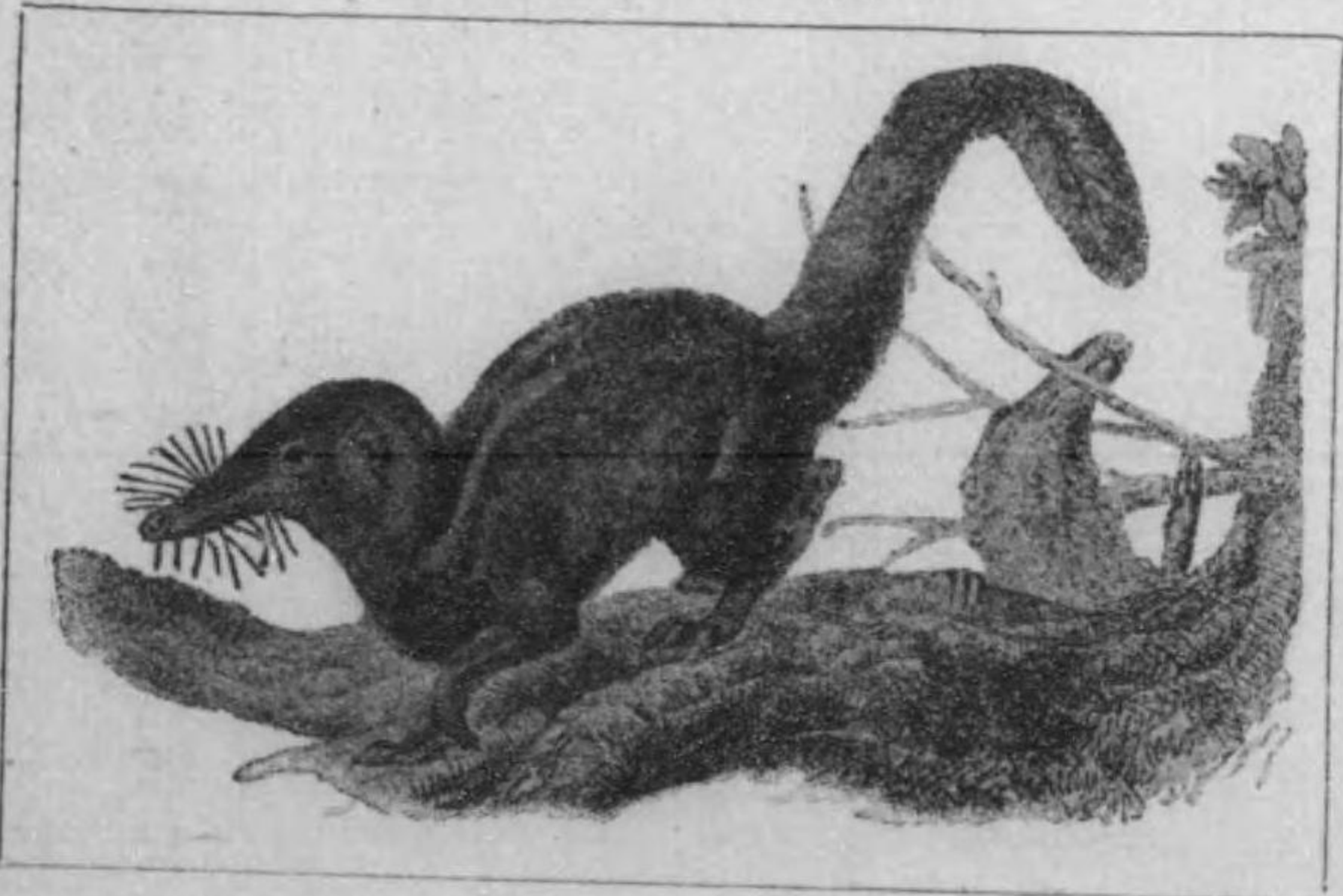


チネズミ類  
Shrew (Tupia)

は食蟻に於ては、蚯蚓状をなし蟻の如き小蟲を捕ふるに適す、口端の狭小にして長きは常に、小蟲を搜索の爲め頭部口端

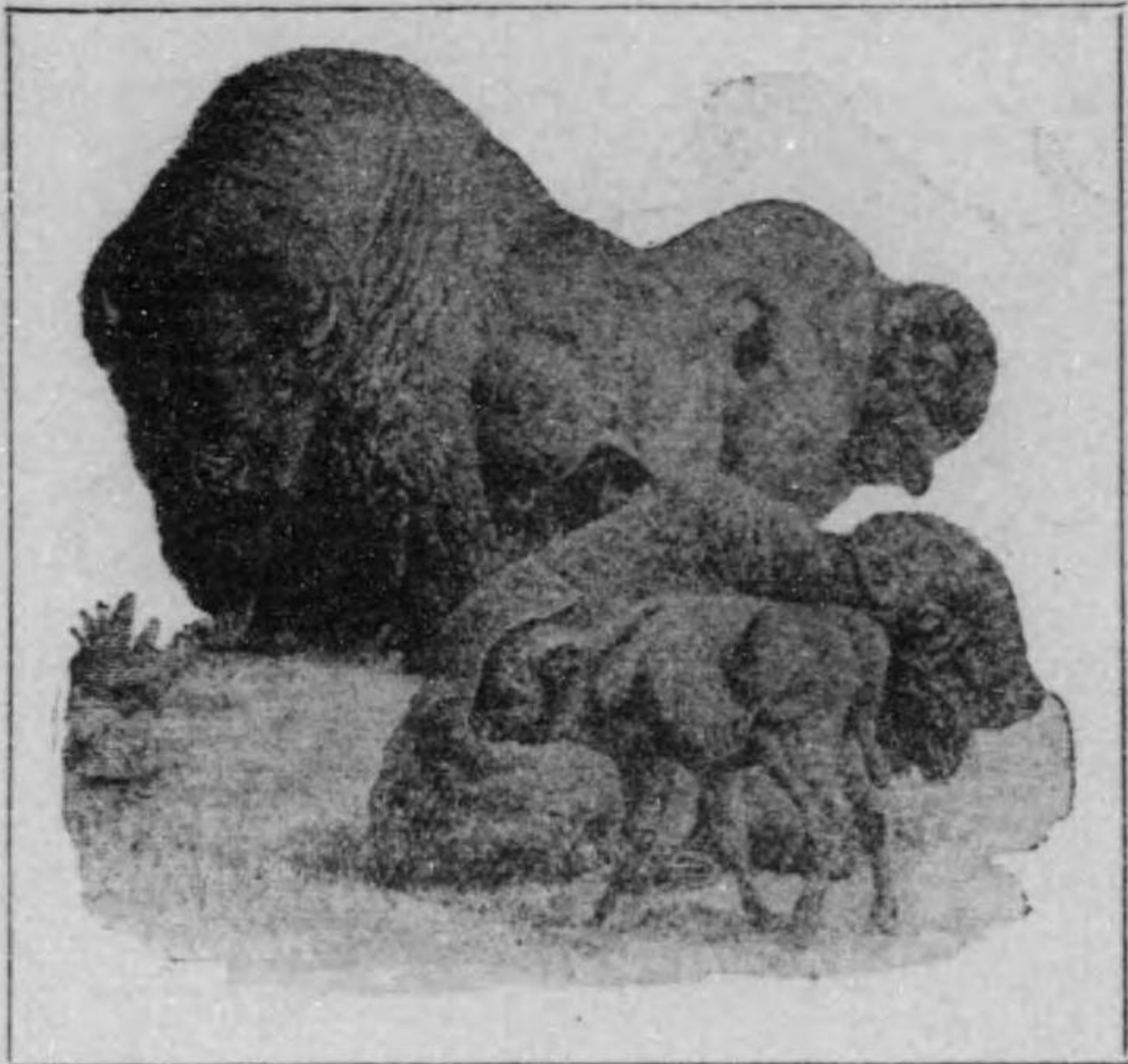
ズミ Shrew (Tupia) (第十五圖) ソレノドン (Solenodon) (第十六圖) の類は、主に昆蟲その他小動物を食して、生活するものなるが、毛深く或は尾端一種の長毛を生ずるものあり、多くは口端狭小その舌

第十六圖



ソレノドン  
Solenodon

第十七圖



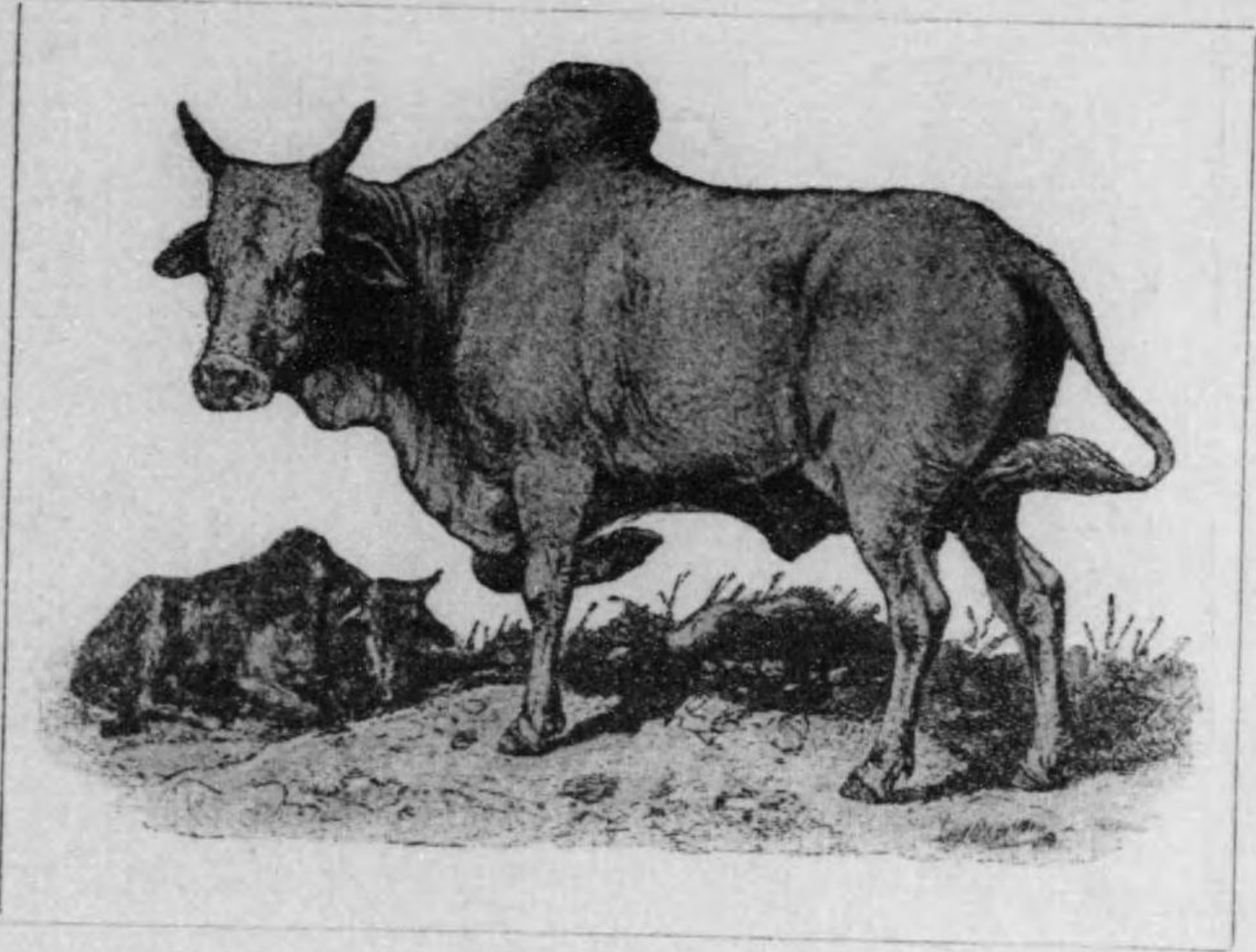
鬚 牛  
American bison (Bos Americanus)

邪氣と一般哺乳動物の形態

を低下し居るにも因るならんか、穿山甲の鱗甲を被ふる、食蟻の多毛なる、「ハリモクラ」の棘毛を密生するが如きは、蟻の如き動物質殊に味臭共に辛辣なる食物を取りて、その刺戟此の如き發育をなせるものならんか、自然淘汰以外に食物に依て形態に變化を來すものありとせば、蓋し此種の事實はその一例たらんか。

牛族は有角を普通とし、鼻端廣くして常に濕潤を帶び、明かに腺の隆起を認めらるるなり。而て又ゼビユ (Zebu) の如き肩峯牛の類ありて、余の理論を説明するに好例を提供するものたり。普通の農牛と雖ども能く之れを檢査するときは、頸背の上部に粗硬の毛を生ず、その鬚を

第十八圖



肩峯牛  
Indian Lumped cattle (Bos Indicus)

巴野生のビゾン Bison (Bos Bonassus) ヤク Yak  
Bison (Bos Americanus) (第十七圖) あり、又歐羅

被ふるものは普通バッファロー (Buffaloo) と稱する北米野生の鬚牛

第十九圖



長角牛  
The leng horn Cattle

第二十圖



水牛  
The indian buffalo (Bos bubalus.)

てもその然るを見る、遂に肩上に肉峯を戴く Zebu (Zebu) の類あり Indian Humped Cattle (Bos indicus) (第十八圖) の如き肩峯牛の類是れなり。そ  
邪氣と一般哺乳動物の形態

第二十一圖



アメリカ大角羊  
America sheep (Ovis Canadensis) Wild sheep of big horn.

(Bos Grunniens) あり、是等の野生牛は肩高く前部大に發育す、日本牛の牡に於

第二十二圖



アイスランド四角緬羊  
Iceland Sheep.

(第二十圖)の如き種類あり、羊<sup>○</sup>、山<sup>○</sup>の種類は角と毛に發育すること(第二十一圖)の如し、又脂肪に富む處の脂肪臀羊、脂肪尾羊(第一圖「イロ」)後者は二十乃至

第二十三圖



バーバリー緬羊  
The barbary sheep (Ovis tragelaphus)

の角の長大なる種類は、英國の長角種第十九圖臺灣印度に在る水牛 Bos Babalus

第二十四圖



アンゴラ山羊  
Angora goat.

三十ポンドの脂肪を有すと云ふること既に述べたる如し又時に角甚だ大なるのみならず「アイスランド」種(第二十二圖)の如きは、三本乃至五本の多きを戴くものあり、粗毛の特別なる發達は「バーバリー緬羊」The Barbary sheep (Ovis tragelaphus)(第二十三圖)と稱する山羊の如き、喉胸下面に粗毛生じて、他部分の皮膚は自然剛厚の觀を呈すること圖の如し、山羊は「アンゴラ」

種 (angora goat) 第二十四圖の如き長き、纖長なる毛を有するものあれ共、多くは頸喉、胸若くは上肩、稀れには腹の下面に及ぶものもあり、その粗毛は牡に於て著しく(第二十四圖の如きあり)而

第二十五圖



麝香牛  
The musk ox (Ovibos)

測は、無理ならざるなり、果して然らば麝香牛 The musk ox (Ovibos) (第二十五圖)の全體に長毛を被ふるは當然なり。夫の短

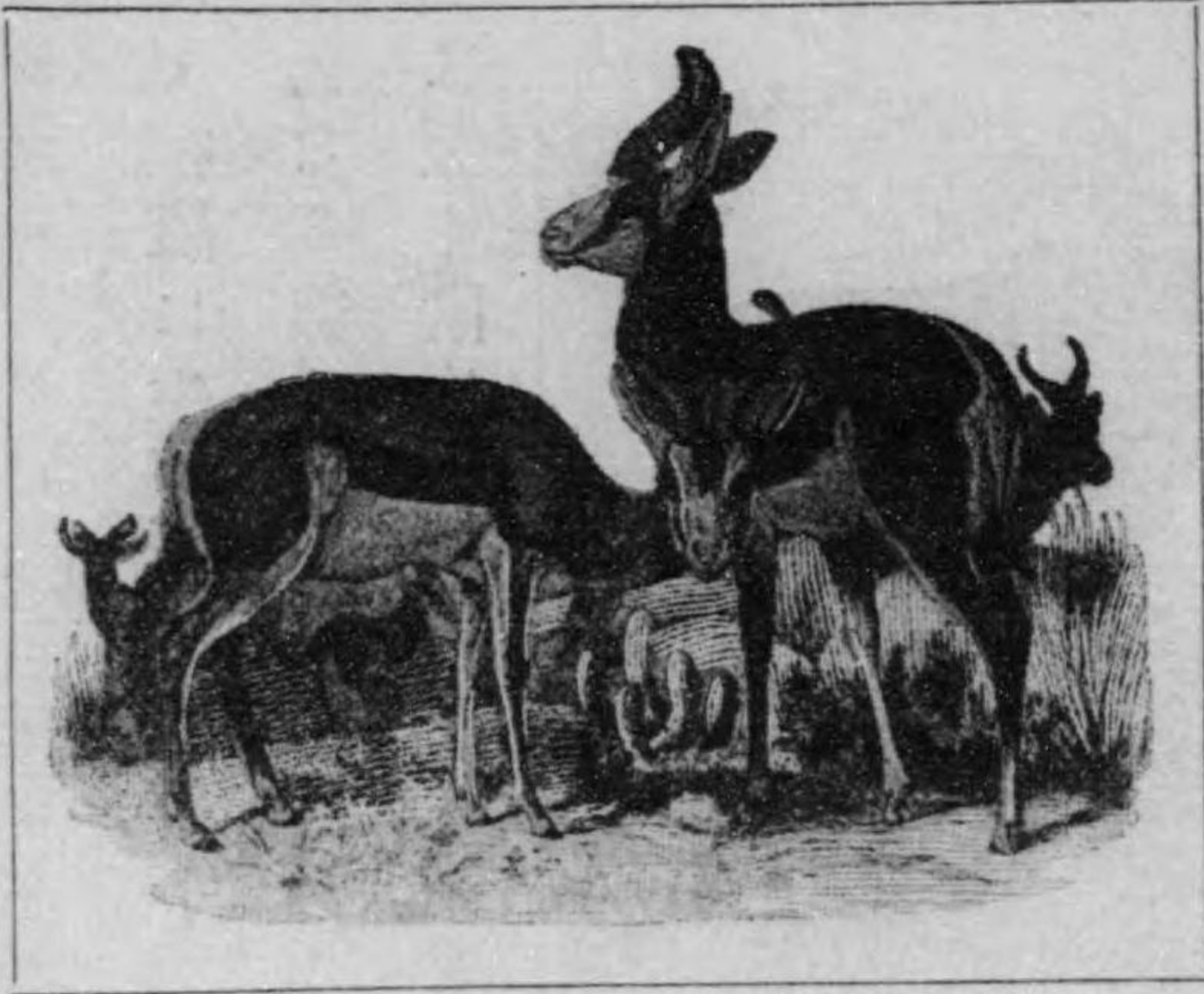
て牡は強烈なる臭氣を分泌すれば、此分泌の刺戟に依て粗毛若くは角の發育を催進すべしとの推

第二十六圖



麝香鹿  
The musk deer (Moschus moschiferus)

第二十七圖



南米産カモシカ  
The springbok (Gazella gazelle)

毛にして皮膚に附生する鹿族中麝香鹿 The musk deer (Moschus moschiferus) (第二十六圖)の割合に毛長きも、亦同一理由なるか、麝香鼠も亦長短粗毛を交ゆるより察すれば、腋香と多毛と何等歟の關係なきや、鹿の背骨に沿ふて尾に至るまで、黒毛を生ずるは他局部に於けるよりは、此部分の毛發育の

佳良なるを察すべく、鹿毛馬、驢馬、羚羊等の鬣又尾の黒毛なるも亦同じ、此鹿毛馬、驢馬等の鬣や尾毛の黒毛なるを見ては、鬣や尾に何等か共通の理由存在すべしとの觀念は、自ら生ずるにあらずや、而て更に進んで脂肪尾羊の事實や鬣や尾毛の長生に就ては、一種の疑問、生ずるにあらずや、但し羚羊の族にして南米産カ

モシカ The springbok (Gazella euclora) (第二十七圖)は脊中に白毛條あり、黒毛は却て横腹に生ず、而て腹の下面に柔軟なる白毛あり、此場合に於ては毛の濃色なる部分は皮膚強健なるを示すもの、如し。鹿族の皮膚は緊張し毛は短く附生し、體軀より邪氣の排泄少なかるべく、而て鹿の頭は高く保



オホジカ  
Elk (Alces-)

持するに、猶ほ體の大きさに比しては頭の小なる方なるが、之れ角の發生に消費せらるゝものならんか、即ち鹿は角を生ずること盛んにして、毎年生へ代はるものなり、(牝は哺乳期あるに依り牡と一様に論ずへからず)或は又オホジカ Elk (Alces-) 第二十八圖の如く甚だ大なるものあり、麒麟 Giraffe (第二十九圖)は體大にして肩即ち前肢高く、身體の邪氣全部が頭

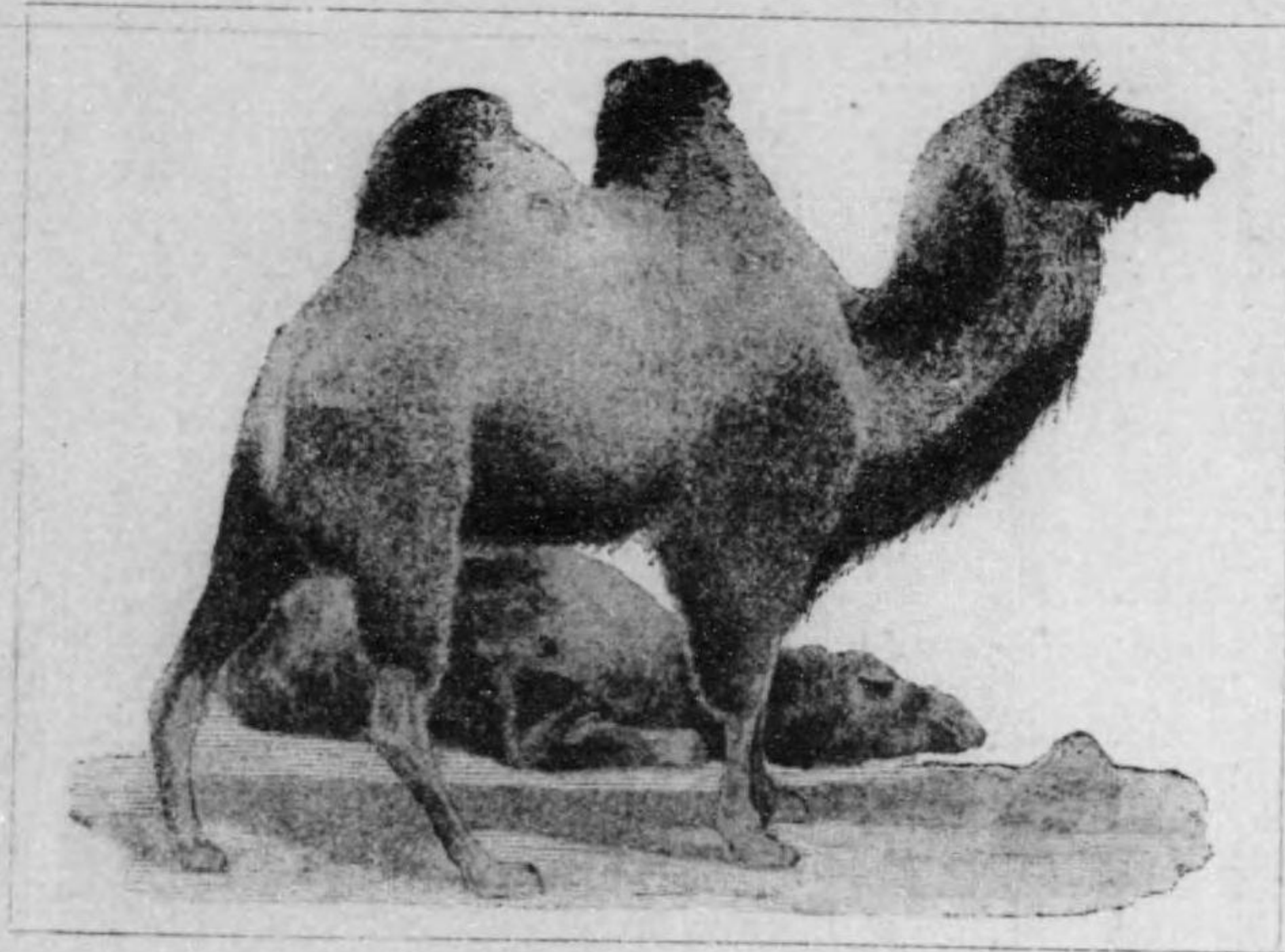
第二十九圖



麒麟  
Giraffe

部より脱散すべきなるに、頭部割合に小なるはその長き頸あるを以てならん、即ち此長き頸に通じたる氣管や食道に排泄せらるること象の長鼻に於けると同一理ならんと思はるゝなり。駱駝 Camels (第三十圖)は體大にして多量の邪氣を排泄するの必要あるべし、即ちその最も上部に肉峯一個若くは二個あり、而てその肉峯と頭の頂には毛總を被むり、その皮膚も粗毛を被むるを以て、邪氣の發散は象、豹の如きとは異りて克く行はるべし、此肉峯内に脂肪集積す、豚は皮厚くして皮膚より邪氣の排泄行はれ難きに依り、脂肪の集積容易なるが、その鼻の前面特に擴が

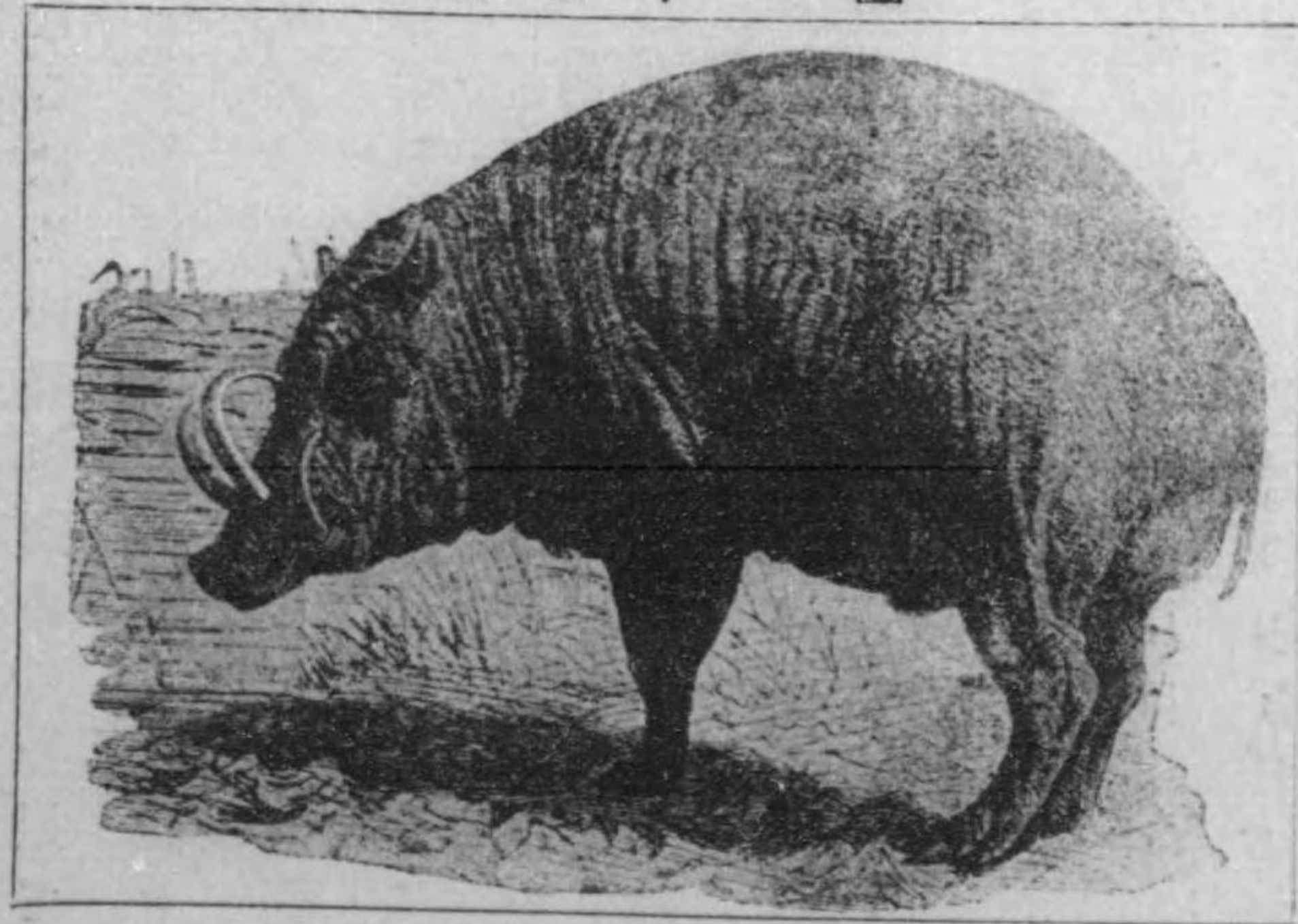
第三十圖



駱駝二峯種  
Bactrian camel (Camelus bactrianus)

し、此豚及野猪に於ては、脊中に沿ふて粗毛を生じ、又牙をも生ず。かの

第三十一圖



猪  
The babiroussa.

りて、排泄すべき面積を廣くし、猶邪氣突出の事は、前已に述べたるが如

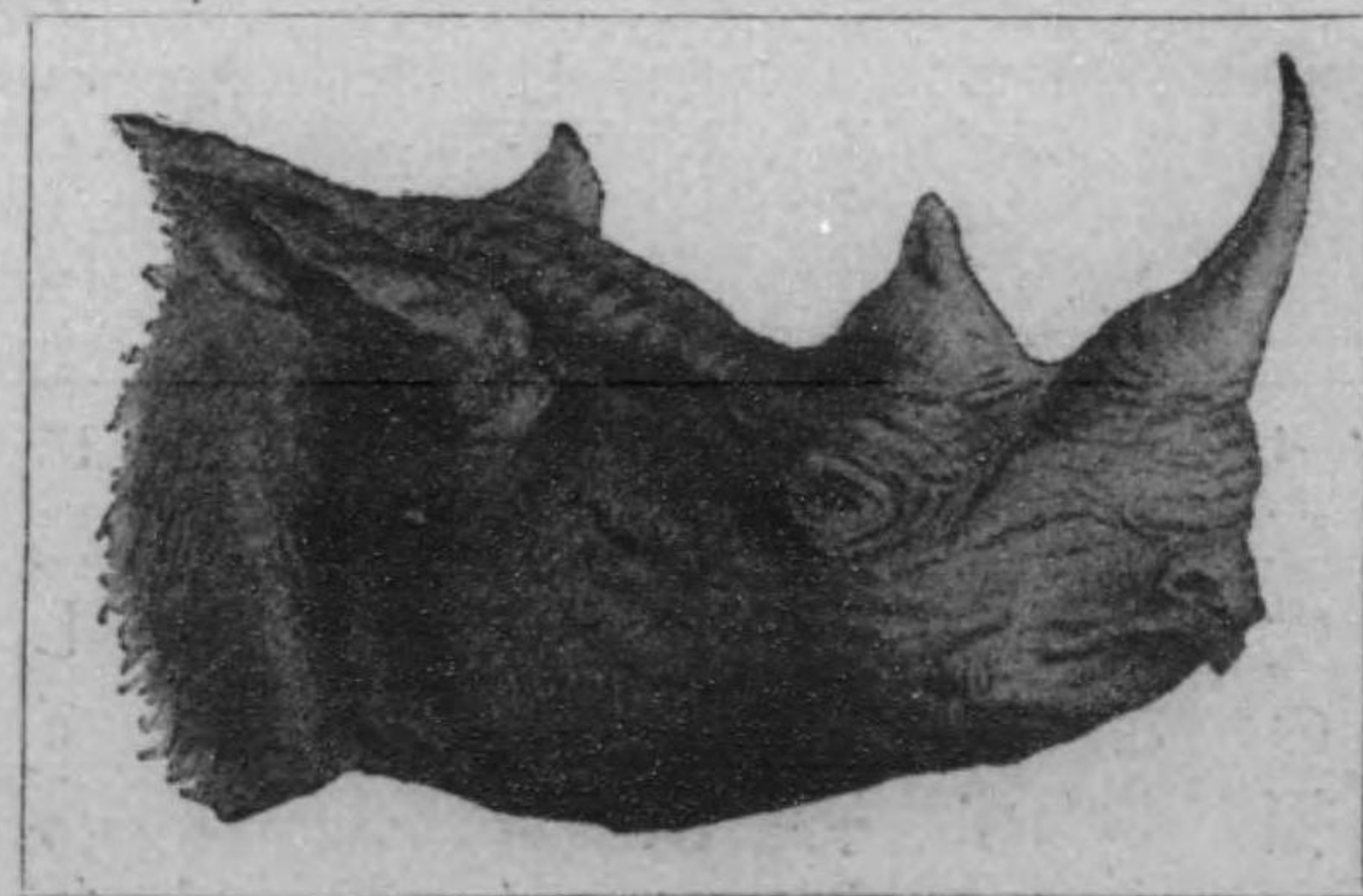
第三十二圖



馬河  
(Hippopotamus)

邪氣と一般哺乳動物の形態

第三十三圖

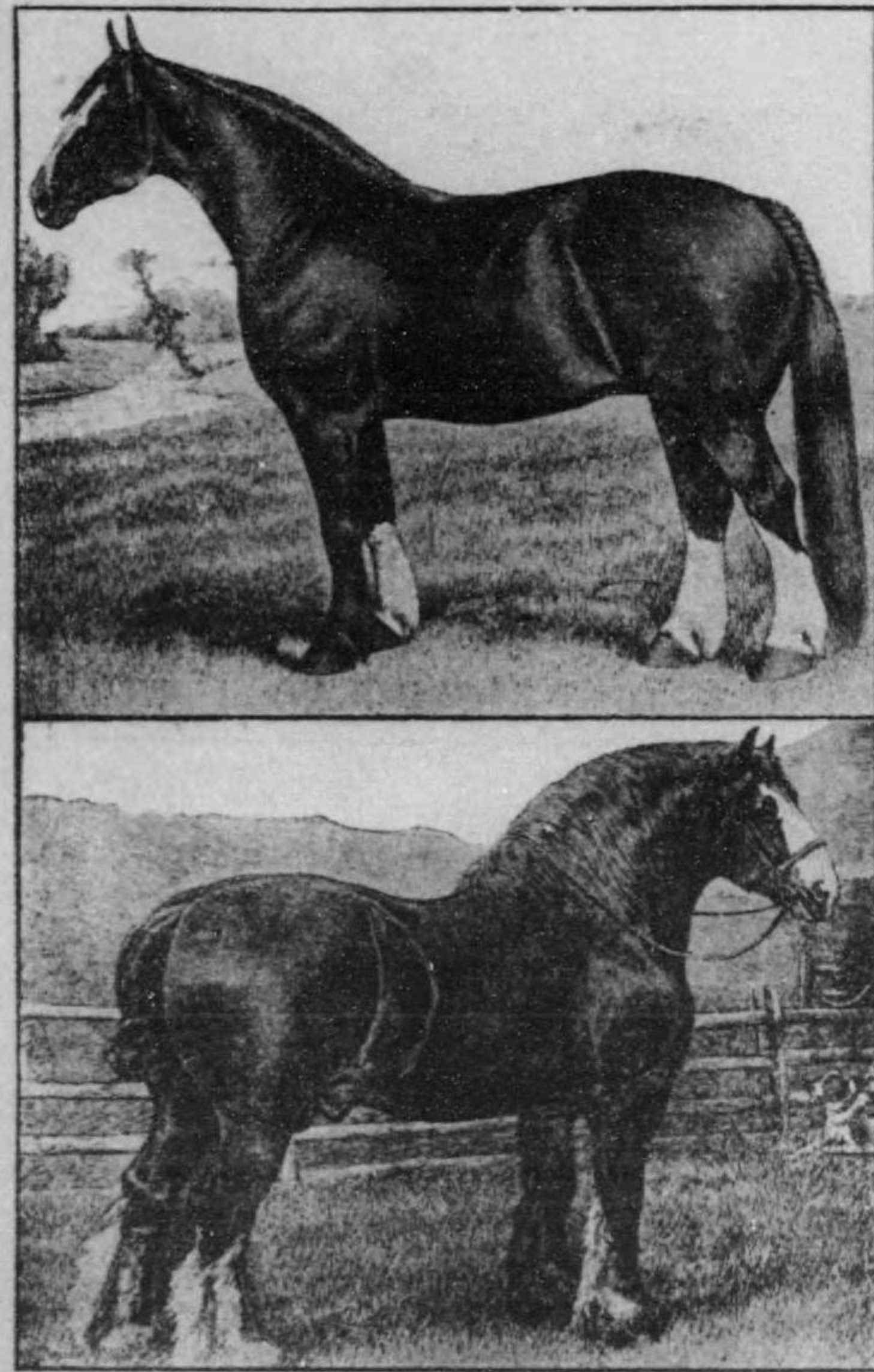


豺ノ頭部  
Head of American shinoceros.

南洋セレベス島に生息する猪 Babiroussa (第三十一圖) と稱する種類の如きは、上下齶共に非常の大牙を生ず、河馬 (Hippopotamus)。

(第三十二圖)の體を水中に没入して常に頭部のみ水面上に出して、鼻端と眼が上位に在るを以て、此部分能く發達することは前既に述べたるが如し。豹<sup>○</sup>第三十三圖)に至ては象の如く皮厚くして毛なく、若かも鼻孔甚だ小なるが、その特別なる點は鼻梁骨に三個若くは二個の角を有する外、邪

第三十四圖  
(イ)クライスデール



(ロ)シヤイア一種

氣の排泄に基  
因せる特別形  
態の徴すべき  
ものなし、或は  
厚皮の褶合よ  
り排泄克く行  
はるにあらざ  
や、若し否らず  
とせば口端上

第三十五圖



象

Indian Elephant

の大に發達せるを以て、余の説を確め得べく、又口端上下唇より邪氣大に排泄せらるべきは、その柔軟なる皮膚に就て察すべきなり、圖は英國の「シヤイ

邪氣と一般哺乳動物の形態

第三十六圖



儒艮又海牛  
Dugong (Sirtnia manataus)

下唇の如き、他に大に排泄する處あるにあらざや、暫く疑を存す。馬の族第三十四圖(ロ)は鬣



ア[種]にして、四肢の下部に粗毛を生ず、此種及「クライスデール」種(第三十圖「イ」)は元來蹄の脆軟なるを云ひ傳ふるに依り、或は下肢の神経弱く、それ故に下部に多く粗毛を生ずるものなるや、併し此種は全體多毛なり。猶象(第三十六圖)并に儒艮(又海牛(Dugong)第三十七圖)に就ては、此章の首に於て述へたるゆへ茲には畧す。

### 神経系統の進化(靈氣の本體)

人が萬物の靈長と成りたる由來を研究するには、主として人の頭腦の發育如何を論ずべきなれども、余は前にも述べたるが如く靈氣を以て、腦神経の本源となし、而て今日の狀態に於ても靈氣は意識を動し、意識も亦た靈氣を動かすが如く、兩々相倚ることなれば、精神能力に關しては、單に有形なる頭腦の發育如何のみに歸して論ずべからざるなり。但し人類の進化は類人猿類より、更に超越したる進化なれば、此二者間に於ける特

別なる進化の起りたる原因が、即ち茲に攻究すべき要點なりと信ずるも、少らくその始めに溯りて略述すべき要件あり、靈氣と神経系統の關係是れなり。

吾人は下等動物より、漸次進化向上したるものにして、此動物界の原始は單細胞動物、即ち原生動物たること最早や疑を容るゝの餘地なきが如し、「ヘツケル」氏の如きは「人類の進化」と云へる書に、その發育進化の順序を詳細に論じたり。而て復細胞たる吾人の身體各部を組織せる、その原位たる細胞の發育せる順序も、此單細胞動物の發育する有様と一致し、又復細胞動物の蕃殖若くは卵の發育する順序も、亦同一なり、仍て余は茲に吾人動物界の始祖たる、單細胞動物に就て、余の靈氣説及神経系統の發育を説明せんと欲す。

單細胞動物即ち原生動物の代表者たる「アメーバ」を、顯微鏡下に檢するときは、唯不規則なる形を成せる透明體の單純なる一細胞に過ぎずして、

その形は時々變形す、蓋しその動くや體より偽足と稱する處の突起を出すゆへ、自然形を變じ隨て内容物も常に移動すべきものとす。此内容物を原形質と云ふ、一種濃厚の液體なり、内に一個の球狀又は橢圓狀の核を有す、此原形質と核とが都て動物の生活現象を收むるなり、即ち運動、感應、營養、呼吸、排泄、生長、増殖等の行はること、是れ之れを生活現象とは云ふ、今茲に是等の詳説を省き、唯々その感應に就て述べんに、此「アメーバ」自ら移動するに際し、その食物となるべきものに遭遇すれば、偽足を出して靜に之れを抱圍して、遂に之れを體内に取り入れ、その養分を吸収し盡せば、又之れを體外に排棄す。特に神経系の認むべきものなしと雖も、食物の選擇をなすより察するに明かに感應すべき神経原質を含有するならん。

單細胞動物は分裂に依りて蕃殖す、即ち一が二に分裂し二が四と成り四が八と成り十六と成り三十二個と成るが如し、此單細胞動物が復細胞動物に進む前に、此單細胞動物の多數が、或時期間分裂蕃殖して集團を成

すものあり、之れを群體と云ふ、後ち個々に離散して成熟し、其各個が又分裂蕃殖をなす、胞子蟲の如きものあるも、普通は水母類中に於て群體を見る、但し之れは已に復細胞動物にして、又少く知覺器を有するが、此復細胞動物に進む順序に就て、茲に「ヘツケル」氏の有名なる「ガストリア」説あり、蓋し此名稱は一般動物の發育中に經過する形態により、又その形態のまま、にても存する單細胞動物の群體あるにより、單細胞動物より復細胞動物の複雑なる組織器官を俱備するに至りたるべしとの論斷之れなり、その委細を述べんに、單細胞動物が相集りて中心空虚なる球形を作す、之を胚球又は胚囊と云ひ之が更に一面陥没して、凹形となりそのまま進んで、内外二層の球形をなしたるを「ガストルラ」といふ。即ち動物の群體なり（學説を「ガストリア」と云ひその微生物を「ガストルラ」と云ふ）此胚球の一方陥入して邊緣漸次に接近し、遂に空洞を生ずるときは、その壁は細胞の二胚層をなす、斯くて細胞に内外胚層の別生して細胞の作用に自ら分業行は

るに至る。即ち内臓は内胚層より發育し、神経の如きは此外胚層に發育するものなるが、此の如く大小の陥入に依り、神経系統殊に五官の如きもの發達して、複雑なる動物體とは成り、諸機官の分業行はるなり。

單細胞の群體より成れる「ガストルラ」は「カタラクト」と稱する種類、曾て海中に發見せられたりと云ひ傳ふる外、現在その完全なる種類を見るものなしと雖ども、空腸類水母の如き下等動物に至ては、一部群體の状態を呈するものあり。稍々高等の動物の卵の發育中には、此變化を能く發現し、高等動物の卵の發育に就て察するも、此の種の變化を爲せる時代あり、即ち吾人々類は單細胞動物の時代より漸次に進んで、下等動物、魚、鳥、獸を経て遂に類人猿類時代の發育を遂げ、今日の人類にまで達したるなり。

動物體、腦神経の發育せる順序を述べんに「アメーバ」の如き單細胞の動物に於ては、無論神経系統なるものなく、又外被なし、その復細胞動物界に於ても、始めは神経系統なく、唯々その「ガストリア」より遺傳せる單純なる

細胞層に依て、その作用あるを見るのみ。海綿蟲并に「ポリプス」水母の如き此類にして、生殖は内層にて行ひ、感覺運動等の動物作用は、外層にて營まるゝのみ、少く進んで稍々高等の動物に至れば、渦蟲類の如く此感覺を司る處に分業行はれて、鋭敏なる神経細胞の小塊は、普通の表皮細胞より別れて、一層深くして保護されたる内部に退き、茲に特別なる神経節を成すなり、之れ併しながら未だ上層の幼稚なる神経節なるも、追て進むに於ては之れより高等なる動物の立派なる中樞神経を作るものなり、蚯蚓の如き環節動物に於ては、表皮感覺層の一部固結せるものが、僅かに中樞神経の根基たるものにして、後ち之れが硬層より分離す。「ヒトデ」の如き棘皮動物に於ては、中心の口の周圍に中樞神経あるも、未だ腦と云はる程度に達せず、漸く蟲類に至て腦や脊索即ち脊髄に相當するものが見へ、その腦は大抵食道の背側にある神経節、又は喉上神経節より發達し、口の周圍や食道の背側に腦の位置するは進化に大關係を有するものゝ如し、脊髄

又は脊索は脊椎動物に於ては、脊骨内に最も安全に保護せらるゝに至れり、その脊椎動物の下等なるものは、魚類、爬蟲類、兩棲類より更に進んで鳥類、哺乳類と成る。而て此最後の哺乳類中の最後が、即ち類人猿類、人類にして、茲に至れば主として腦、中樞神經の大きさとその裂溝等に巧妙の差別を見るに至る。

さて吾人人類が精蟲や卵(單細胞動物)より完全なる人體にまで、發育する間の變化には、その祖先たる下等動物の形態を一時發現し、又は稟有し居るとは、今日生物學者の承認する處なり、即ちその精蟲と卵とが人類、下等動物、昆蟲に至るまで形態能く相似たるものあるは實に驚くに堪へたり、而て是等が發育を始むる状態の類似點も、前既に述べたるが如し、斯くて胎兒の初期に於ては、少時間魚族や他動物と共に同様、鰓裂を現はす時期あり、此性質は脊椎動物を通じて一般なり、但し脊椎動物中魚族は、今現に鰓孔の必要あり、而て水陸兩棲の蛙の如きに至てはその幼兒おたまし

やくしのみ之れを存し、進んで哺乳動物に至ては、その充分發育したるときは、該痕迹を認めず、此の如きは人の祖先が、曾て魚族たりし時代ありしを示すものなるが、已にして五六ヶ月目には、胎兒の全身に深き毛を、以て被はる時あり。此毛後ち消失するも、之れ暗に獸類たりし時代ありたるを示したるものにして、出産當時に於ける子供の腦髓は、その褶や裂溝等單純にして、大に類人猿類のそれに似たる處ありと云ふ。人の肋骨は十二對にして、黑猩猩や大猩猩は十四對なるが人の胎兒は十三四對なりと云ふも、之れその祖先の性質を現はしたるものなり、即ち「ヘツケル」氏の個體發生史は、生族發生史の短縮せる回顧なりと云ふもの之れなり。

茲に於て余は斷言せんと欲す、余が始めに述べ置きたる處の靈氣なるものが、神經系統の作用以外に、一種靈妙なる神經的感覚機能を呈するは、之れ未だ神經組織を有せざる動物の有する、原始時代の神經作用なることを、之れを原始時代の遺物なりと云はんも、實は之れ神經の原始にして、

今ま現に各種細胞にその性質は存在する筈なり、殊に吾人の血液中にある白血球の如きは、その形状や作用も全く「アメーバ」に酷似せり。神経系統以外に靈氣あるを聞て、二元説の如く觀したるもの、茲に至て明かに一元たるを知了すべく、余の靈氣説を目して、詭言なりとせるもの聊か了解する處あらんか。此靈氣が種々刺戟を受けて、段々と前述の如き複雑なる神経系統を作り、漸次に複雑なる分業を行ひ、以て益々高尚なる作用を遂るに至りしなり、前に靈氣の體內を移動することを述べたるが、此性質はやがて神経系統を生成して、之れが聯絡を組織すべき端緒なるが、靈氣の性質よりして察するに、始めは何物の認むべき物なく、唯々何處となく、又如何様にも移動したるものが（第一）後には一定の徑路を通過して（第二）之れが遂に神経系統の組織を現出するに至りしなり（第三）大體上より云へば、單細胞動物は第一の時期に相當し、細胞群體は第二の状態を有し、復細胞動物は第三の神経状態を現はすと云ふべきも、然れども復細胞動物た

る吾人が、今現に原始的なる靈氣を有するが如く、如何程進化向上するも、その一び有したる原始的性質は潜在して消滅すべきにあらざるなり。さらば先づ此原則を體認して、試に靈氣の始めに溯りて考ふるときは、單細胞動物以前の生物「モネーラ」もあり、又進んでその以前もあるべく考ふるときは、更に廣大無邊の世界あるを發見すべきならんも、今茲に之れを論ずべき限りにあらざるなり、但し靈氣刺戟を受けて發育進化する云ふも、その原始に溯りては、靈氣そのものが刺戟たるなり、而て惟り神経系統のみならず、體の各部分も皆同様靈氣の爲め發育したるものなるが、外界の刺戟を受くれば受る程、益々之れに應じて複雑高尚なる組織を成すに至りたるは、靈氣の靈妙なる感應作用ありて、然らしめたるものにして、段々と中樞神経も出來て、生存慾も加はり來るに隨ひ、彌々その性質發達して益々確實なるに至りたることは、靈氣の性質より推して察するに難からず、（遺傳、保護色、擬態、可能性、治療的作用等生活現象に適應なる諸性質）そ

の有様を察するに、靈氣のみにては、複雑なる外界の刺戟に對するに不充  
分なるを以て、固定的器官なる腦神經を作り、その常理恒例たるべきもの  
は、概ね之れに當らしめ、靈氣は自ら不測の變化に對して應ぜしめんとす  
るもの、如し、故に腦神經の働きは、持重保守的にして遲緩なる代はり  
は確實、而て靈氣は神速機敏なるも、輕忽時に不確實なるを免かれず、即ち  
一は理性的にして一は感情的なり。

靈氣、腦神經は勿論身體諸部の發育發達は、皆之れ刺戟の結果なりと云  
ふ斯くて刺戟を受ること多大なるものは、能く進化發達し而て何等かの  
状態の下に於て、刺戟を受ること輕少なるものは、進化遲鈍或は今日全く  
進化の停止し、若くは退却したるものも之れあるべし、此法則は現今に行  
はれつゝあることを言を俟たざるなり、而て遂に類人猿類にまで到達した  
るが、是れまでの進化の經歷は、既に先進者の研究説あれば之れに譲り、余  
の論ぜんと欲する處は此より更に進んで、如何なれば人類が惟り萬物の

靈長とも云はるべき異常の進化をなしたるかを攻究するにあり。

### 人類頭腦の進化

人が類人猿類の何種より進化せしものなるか、學者の所説未だ一定せ  
ざるが、之れ蓋し「ダーウイン」氏の所謂消失聯鎖ありて、その迹を綜ぬるに  
困難なるにも依るならん、余輩はその猩々(キユウイル氏説)たると、黒猩々  
(ジエフルア、チラール氏、ワルダイル氏説)たると、將た大猩々(オウエン氏説)  
たるを問ふを要せず、又類人猿類より直接なると、消失聯鎖の再現として  
「ピテカントロプス」(猿人)を仲介とするも、前代の人として「ネアンデルター  
ル」人より現代人の降りたると云ふも、此の如き問題は余輩攻究の範圍に  
あらずとし、兎も角も「ダーウイン」氏の云へる如く極微細の點か、永年月の  
間に極めて徐々に進化したるものにして、今日も猶一部の學者間に唱へ  
らるゝが如き、偶然突發の變化に依て現状態に至りたるものと信ずるこ

と能はず。

前章既に論じたる如く、人の毛髮の長生する所以の理は、その常に上昇する處の邪氣の刺戟にありとし、その他一般動物の粗毛若くは長毛の生ずる所以、脂肪の集積する所以、角牙の發生する所以は皆な等しく此上昇する處の邪氣の刺戟に原因するものと斷したるが、茲に於て人の頭腦の斯くまでに發育したる原因も、亦等しく此邪氣の刺戟に由來すと、斷定するは當然の結論と云はざるべからず。蓋し頭の外部に生ずる處の毛髮が他の動物よりは特別に長く發育する原因と、その内部に於ける腦神經が他動物に比して能く發育したる原因と、同一なること疑ふべきにあらず。而てその原因は邪氣の刺戟にありと云ふも、此邪氣常に上昇する性質あるを以て、猶一步進んで論ずるときは、人が直立の姿勢を執り得て、その頭部が體の最高處に位する故に、起因したるものと云ふべし。即ち人の祖先が直立の姿勢を取り得るに至りて、人類の進化向上が顯著なるに至

りしならんと思惟するものなり。達因氏も人の祖先が直立の姿勢を取るに至りて、種々著しき進化の發現したるを唱道す。但しその原因は余の唱道せんとするものとは、大に趣きを異にせり、即ち「ダルウイン」氏は人が直立し得るに至りて、手は種々の器具を造り、石又は棍棒を投げて禽獸を得、若くは食物を得ること容易となりて、滋々發達し且つ直立の姿勢は爲めに體格構造の上にも、變化を生じ、尾の消失したるも直立の結果ならんと云へり。今前例に依り、達氏の著書より之れに關する諸説を抄録せんに曰く「人類の祖先が漸次直立の姿勢を取り、其手及腕は益々握取其他種々の行爲をなすに適し、其足及脚部は益體重を支持し、身體を前進するに適するに至り、之れに應じ其他の構造上の無数の變化續發したるものならん、例へば骨盤は擴大し脊梁骨異常に彎曲し頭部の位置も變化し、是等は皆吾人人類の今日有せる構造なり、教授「シャーフハウセン」曰く人類の頭骨に存する乳嘴突起は頗る強大にして之れ全く人類が直立せる結果な

り」と此突起は猩猩、黒猩猩等には存在せず、大猩猩には存すれども人類に存するものよりも小なり、其他人體の中人類が直立せる爲め之れに附隨して存在せる者と思はるゝ者多し然れども斯の如き相關の變化は自然淘汰の結果なるや、俄かに一局部の使用増加し遺傳作用之れに加はりたるによるか、一局部が他の體部に作用したる者なるや、將た是等の作用共に興りたる結果なるや、之れを確定するは極めて困難なり、恐らくは是等の作用共に興りて變化を生ぜしならん云々又曰く「夫れ人は其手頗る巧妙にして、其意志に應じて作用するが爲めに、今日地球上の動物中最高等の位置を占むる者なり、シーベル曰く「手は凡ての器具を作るを得るものにして、意志之れに應じて働くを以て實に手は世界中最大有力なる者と云ふべし」と然れども手及腕は歩行の際或は身體を支持する際絶へず之れを使用し或は前に述べたる如く其構造特に樹木攀縁に適せる間は到底之れによりて武器を製造し或は狙外れず石或は鎗を投る能はざる者な

り、加之斯の如き粗雜なる行爲をなせば觸覺も亦痴鈍に陥るべし蓋し手及腕の巧妙なる作用は全く觸覺の鋭敏に基く者なればなり云々人は二足類にして猿類は二足と四足獸の中間に屬し、殊に大猩猩及是に最近縁の諸動物は、寧ろ二足類に近きものとせり、仍て達氏も假に大猩猩の類絶滅せりとすれば、永久二足類に進化する動物なかるべしと云へり。

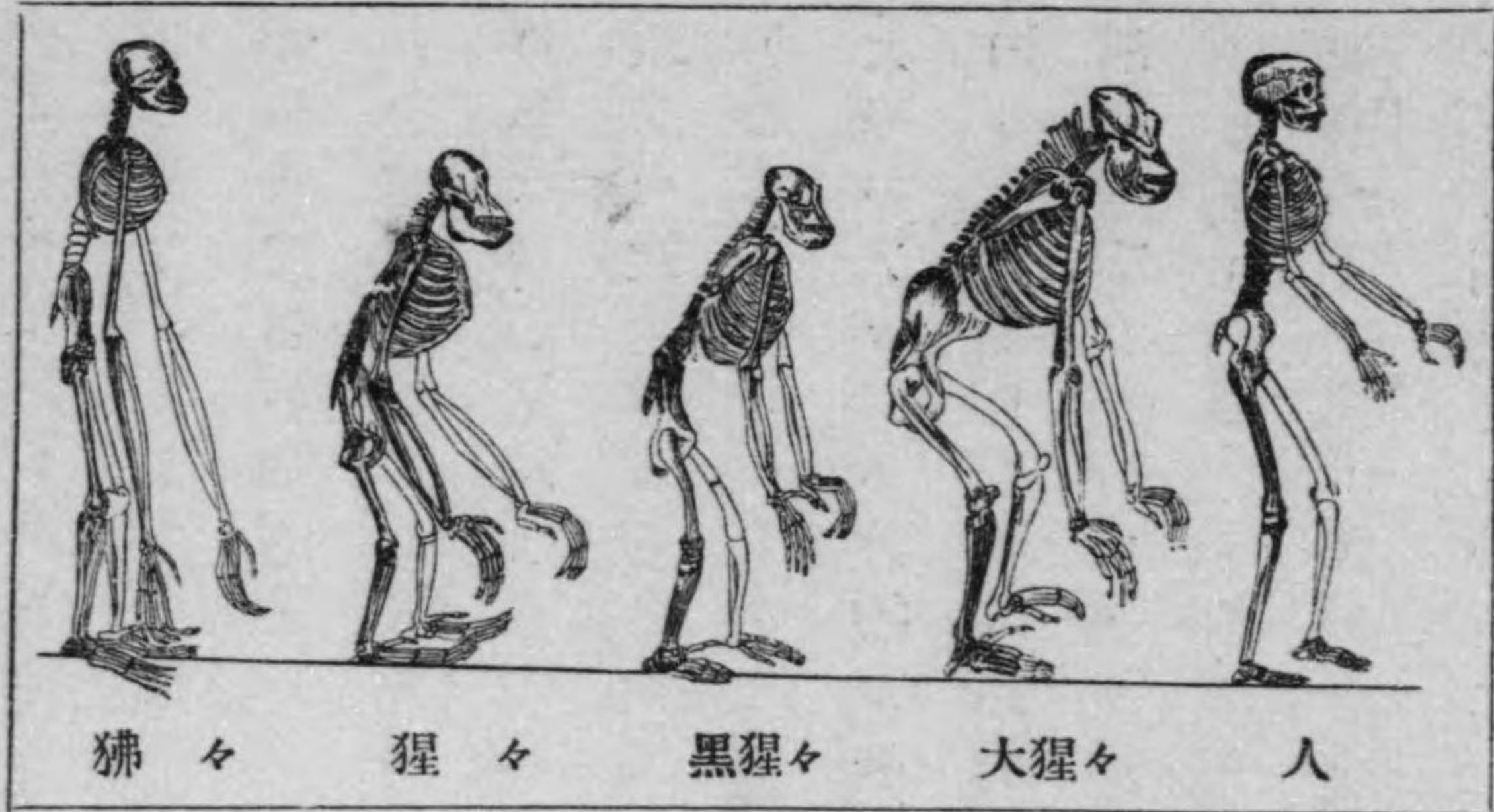
扱て人の祖先が是等類人猿類より進化して、完全なる直立の姿勢を取り得るに至り、達氏の云へるが如く、種々物理學的原則に依り相關的に體の諸部に變化を來し、又手を使用するに至りて、智巧を要するより、心理的にも腦の發達を致したるならんも、余は邪氣の上昇の爲め直接には絶へず腦神經を刺戟し、間接には大脳下垂體や甲狀腺の如き、腦その他身體の發育に必要な腺を刺戟して、腦神經の發育を助成したるものと信ず、蓋し牙角骨質の發育の如きも、無論斯の如くにして、發育せらるべし、猶邪氣、體の或部分に停滯するときは、靈氣來て之れが疏通を圖るものなるが、そ



の頭部に鬱滞せる場合に於ては、殊に能く疏通を圖るなり。之れ全身の最要部なる脳に接近し居るを以て、その影響切實敏捷なるを以てならんか、斯くて頭の外面よりも、邪氣の排泄能く行はる様に相成り、毛髪も長生するに至りしならん、此の如き關係は、蓋し内部にも行はれて、脳の實質を發達せしならんと察せらるゝなり。

余は茲に有名なる「ヘツケル」氏の著書「人類の進化」中より第三十七圖として人及類人猿類四種の骨格を借用して讀者に紹介せんと欲す、但し「ヘツケル」氏の之を掲げたる趣意と、余の之を利用するの目的は異れり。即ち余に於ては之を二つの説明に應用せんとするものなり、その一は大猩猩々の頸骨の棘狀突起が異常に發達せることにして、その理由は已に第二圖に於て駱駝と熊の骨格を以て説明せり、即ち脊梁骨の棘狀突起も、その高處に於て能く發育することを示したるが、茲には頸骨に異常の發育をなせるを示し、黒猩猩々に於ても稍々多く、その幾んど直立せる狒々に於

第三十七圖



人類頭腦の進化

人と類人猿との骨格姿勢

ては少く發育し、その眞直立なる人に於ては全くその跡を認めず、即ち直立姿勢の角度に應じて、その有無多少ありて骨の發育が高部位に於て顯著なるを示したり、而てその二は即ち直立の姿勢が眞直なればなる程、その最上部なる頭骨が、能く發育せるを示すものにして、之れ本書進化説の要旨たるものなり。但し余は此場合に於て、單に頭部が最上部に位置すると云ふ語を避けんと欲す。如何となれば少く體を斜めに頭を擡けても、猶頭は最上部に位すべければなり。固とより斯る姿勢の頭も、その否らざるも

のよりは、上へくと上昇する處の邪氣の刺戟を、比較的多く受けて發育することなれども、その他の部分をも、能く發育せしむべし、即ち大猩猩の頸骨棘狀突起の如き之れなり。而てそれ丈け頭骨の發育を助成するの効力を減殺す、然るに人類は最も完全なる直立のものなるにより、全身即ち體軀は勿論足端よりの邪氣も、皆悉く上昇して頭部を刺戟するなり、即ち頭部を挑起するその角度に比例して、頭腦の發達することを證明するなり、米國に於て「ダーウイン」氏の進化説に強く反對を唱へたる「ハーバード」大學の「アガジー」教授が「脊椎骨の立つ程度によつて動物の進化の程度を知る」と云ひしも、即ち此現象を指したるものにして、事實明確なるが、然れども同氏も矢張りその何故に然るやの理由は説明せざりき。「ダーウイン」氏に至ては、人が直立の姿勢を取るに至て大に進化せりと云ふて、その理由を説明したること前既に述べたるが如くなるも、その理由は未だ人をして満足せしむるに至らざるのみならず、自身も亦満足せざるもの

と認むるに難からざるなり。

如何なれば人が直立するに至りしか、或は人の頭部は重き故に直立したるならんと云ふ説あれども、その由來は已に神經組織が、下等動物に現はれ始めた頃より徴せらるゝなり。即ち神經の大切なる部分は、營養を攝收する處の口邊近くにあること、之れ頭部を挑起すべき所以にして、已に蠶の如き蟲類に於ても實見すべし、而して多くは何等かの刺戟に遭へば、頭を擡ぐるなり、斯くて脊椎動物中魚類の如き、又は哺乳動物中常に頭を垂れ居るものもあるも、多くは之れ蠢愚にして、體制も劣等に屬し、その他は概ね頭を、體軀若くは脊骨以上に擡げ居るものなるが、その體を半起立に持つのは、始まりは、犬猫の如くその休息せる時、臀部を地上にすえて、その儘にて蹲踞するのが始まりにして、遂に猿猴類、類人猿類の半直立の姿勢より、完全なる直立人類に至りたるが、是等姿勢の變化も極めて徐々たるものにして、判然と突發したるにはあらざるが如し。

右の如く完全に直立せる人の頭骨が、その下部より上昇する處の、生理的邪氣の刺戟を最も多く受けて、能く發育したるのみならず、その内容物即ち脳神経系統の發育をも、同様催進したるものなるや、更に疑を容れざる處なり。但し此刺戟は前既に述べたるが如く、前額に當る大脳下垂體と云へる分泌腺や、喉頭の左右に存在する甲狀腺(詳く云へば腺の神経)を刺戟して、内分泌を促し、頭骨やその内容物たる處の物質を、發生供給し、一方には又直接頭骨や、腦中樞神経を刺戟し、之れが發育を促進するなり。蓋し此等の腺が身體の發育、殊に腦神経に重大なる關係を有する事は、早く既に認められたる事實なるが、近年に至りて内分泌即ち「ホルモン」の研究勃興して、いよゝゝその理明確となれり。之れに依てこれを察するに、人が直立したるが爲め、此等の腺が刺戟を受けることは他動物(蝙蝠は殊に然り)よりも多大なれば、隨て頭腦の發育も、一層優良なりしや疑を容れざるなり。

大脳下垂體は、大脳の前端に垂下せる分泌腺にして、前、中、後の三個より成り、その前葉よりは骨質を分泌するゆへ、腦神経の發達には大關係あり、而してその後葉の分泌物は心臟血管に作用し、又尿の排泄に關係ありといふ。

甲狀腺は稍々淡色にして細小楕圓の四個あり。若し是等の腺を剔去するときは、骨の發育が悪くなるより營養不良に陥り、身體の發育茲に停止して、小兒なれば所謂侏儒一寸坊と成りて、神経系の發育も妨げられて、白痴状態に陥ると云ふ、或は甲狀腺を取り去れば、直ちに強き痙攣を發し、副甲狀腺を取去れば、漸次に營養の不良に陥るが、要するに是等分泌腺は、全體の適良なる發育に必要な物質を分泌して、成長を助成す。此理を推して考ふるに、身體の發育する間は、盛んに此等の腺が邪氣の刺戟を受くる期間にして、成長の停まるは邪氣の通路に變更を來たして、その刺戟輕減したるときならん。蓋し邪氣の通路變更する

ことは老年に至り眉毛耳毛の長成する理由を推して察し得らるべし」顔面の角度額から鼻の下まで線を引き而して鼻下から耳にかけて線を引ひてその角度を取りたるものを以て、人種の文野を知るに足るべしと云へり、即ち頭腦の能く發達せるものは、角度大にしてその小なる程野蠻、腦力の不足を見る、之れその祖先動物との遠近を微すべきものにして、固と直立姿勢に原因すること第三十七圖を見て明かなり。此方法によるときは、最も高等の猿類は五十九度、ネアンダーサル人の角度は六十二度、現代の最も進みたる人間は八十度乃至八十五度なりと云ふ。

人類の頭腦即ち頭骨と、その内容物即ち腦神経系統との物質的發達は、主として前陳せる如き理由に原因するものとなし、次に起る問題は最も困難なる無形の心理性、發達の原因如何にあるが、此問題は已に往古以來哲人學者の議論も多くありて、到底その一斑をも説明し難しと雖ども、精

神の起源及その發達問題は、取りも直さず人類の起原及その發達如何と同じければ、之れを人生觀の諸説と同一視して可なるべし。

余は直下腦神経の作用發達に關せる、余の研究説を述べべきなれども、茲に論すべき一二の問題あれば先づ之れを述べんに、或人は人が好奇心即ち新規を好むの性あるは、人を進歩せしめたる重大なる原因なりと云へり。之れ「ダルウイン」氏の「人が言語を用ゆるやうに成りて後ち忽ち智力の進歩頗る著しきに至れり」と云へると同意味なり、此説は往々他に唱道する人あるも、鳥獸の如きに於ても、各若干の言語を有することは、皆人の知る處にして、或鳥に於ては隨分多く之れを使用するものあれども、左程智力の發展するやうにも見へず、人も始めより多く言語を有したるにあらずして、漸次に發育したるものなり、但し言語の如きは人と成りたる後のことにして、余輩も亦全く言語の効果を否認するものにあらざるも、畢竟他に腦力又は智力の發達を、催進すべしと認むべき原因あるを知ら

ざるに出てたるもの、如し、余はその基礎なければ、發達するに至らずと云ふ、基礎とは何ぞや、腦神經の物質的發育之れなり。即ち腦神經の發育して、智力發達すと信ず、或は之れを反對に智力發達して、爲めに腦髓發達すと唱ふるものあり、米人シトニー、ギューリック氏の如きも、その一人にして、その著「人類進化論」に下の如く論斷せり、それで心理性の發達はたゞ腦髓が増大した結果であると云ふよりも、腦髓の増大は心理性の活動が旺盛になつた結果であると云ふ方が順當であらうと思ふ、若し心理性がたゞ腦の髓伴的、即ち附屬的現象であるならば、腦髓が増大した原因が分らぬ、云々是迄腦の増大した原因明かならざるが爲め、種々の謬説出てたるが、余は已に腦髓の増大せる一大原因を發見して、之れを示したり、若かもこの原因即ち邪氣の刺戟、又は炭酸瓦斯の肺臟以外より發散する作用は、意外に大にしてその生理上に及す影響、亦甚だ重大なりと云はんと欲す。

### 心理性の進化

心理性に關しては余は已に靈氣なるものを把へ居るを以て、他よりも稍明晰に説明し能ふの便利を有するものなるが、此靈氣は曾て述べたるが如く、至靈至妙宇宙萬有の本源にして、自ら刺戟物と成り、亦た自ら靈動して遂に萬物を創造し、又自ら刺戟を受て益々發達する力を有するなり。その名は從來種々に稱へられたること既に述べたるが如し、但し靈氣以上は何物が在て靈氣を生じたるものなるか、靈氣が即ち宇宙唯一の靈物なるか、此場合には問ふを要せざるべし、但し余は創世記に神が先づ第一に光明あれよと命じたることや、回教が火を以て萬物發達の原因なりと云へることに興味を有し、又希臘哲人「ヘラクライトス」や「デモクリタス」が火を以て人間の本源としたるに、敬服せざるを得ず、此靈氣は宇宙に瀰漫し萬物の實體と靈力とを、刺戟に依て創造したるものなりといふも、刺戟

そのものが靈氣なり、靈氣そのものが刺戟なり。生物は靈力の現に活動するものにして、動物は生物中殊に能く活動するものなり、但し岩石の如き無機物と雖ども、その細微分子を顯微鏡下に照せば、皆多少轉動す、之れを「ブラウン」氏の運動と云ふ。然らば斯かる運動はその細微分子より成れる一岩石の内部にも行はるゝものと察すべし、蓋し固形物硬化物間に存在するに隨ひ、運動遲鈍と成り、之れに反して硬度微弱なるに隨ひ、靈氣の他を轉動する力は益々活潑機敏となりて、遂に神秘的大自在力を現するを見る。

扱て生物は始め如何にして發生せしや、都て是等の起原問題は今日猶ほ不明にして、筆舌の述べ難きものあるも、決して突然偶發せるものにはあらずして、非常の年代を重ねて漸次極微分子の無生物より、極微の生物とは成りたるものゝ如し、但し無生物と云ふも、吾人今日の科學若くは知識や手段を以て認めて、無生物と云ひたるのみ、既に己にその内部には多

少生物たるの性質を稟有したるものなるべし、その性質多きを加ゆるに至て、遂に判然生物とは稱せらる。若かも進み進んで單細胞無核の「モネラ」の如くなるのみ、是れより後に至ては刺戟の爲め、その靈氣が神經細胞を生じ、之れが刺戟の爲め發達して、追々神經系統を生じ、遂にその腦中樞をも發育するに至る、同時に腦神經以外、即ち全體の發育も之れに準じて進化し、體制益々複雑と成る。即ち「ベルグソン」氏の「生命は始めより今日に至るまで、唯一無二の衝動力の連鎖で、件の衝力がさまざまの方面に岐かれて、多種多様な進化の路を生じたのである。生命は絶へず生成發達して、今日に及んだのである、されば發達そのものがやがて生物の上に無數の分裂を喚び起し、勢ひ其間に衝突矛盾の避くべからざるに至つたのである」云々之なり。而て靈氣を外にして、神經系統にも體制上にも、分業行はれたること前既に論じたるが如し、靈氣の特性より察するに、生物が最初に有する性質、即ち原始慣性は習慣性ならんとは前已に述べ置きたるが、

之れ惟り生物のみならず、無生物に於ても皆な同様ならんと思はるゝなれども、茲には生物に就て述べんに、此習慣性ありて後ち、種々の特質を帯ぶるに至りしなり、生物には種々の繼續即ち蕃殖性と、生命を維持すること即ち生存性と此二者を第一次の本能又は原始性とも云へり、成る程生物としては原始とも云ふべきも、然れども此習慣性は無機物にまで及ばされ、又或は此習慣性ありて始めて、第二次本能をも有するに至りしやと認め得べく、實に此習慣性は根抵深遠なり、此習慣性宇宙に行はれて萬物が有する性質、原理、公則等存在するなり。仍て此性を萬有の原始性と認むるに至ては、生物が有する諸種の現象に對して、最早や奇異の念を以て迎ふるに足らざるなり。之れ頑固なる因果觀を抱持する様なるも、余の企望は先づ出來得る丈けは原因を究めて、その結果を綜ねんと欲し、始めより一も二もなく目的觀を歓迎するものに雷同し能はざるなり。

余は此處に靈氣の機能を述べんと欲するも、匆卒に之れを持ち來ると

きは或は誤解を惹き起し、爲めに困難に陥らんことを恐る、故に余は豫め茲に余が靈氣に就て觀る處の一二點を論辯せんと欲す、他にあらず、余が成る丈け科學的に原因結果の理法に準據せんと云ひながら、却て目的觀のそれよりも、猶擬入格意識的なる靈氣なるものを持ち込み來て、説明を試みんとするを見て、之れ果して科學的なるやと難ずるものあらん、續て曰く靈氣に種々靈妙なる機能を負はしむると、一種の不可思議物又は宇宙の大靈力を肯定して之れに負はしむると、幾許の差別あるや、若し腦神經中樞の外に此の如き神秘的存在を認めんと欲せば、之れ煩雜を致すの基にして寧ろ始めよりその面働なる靈氣を持込まざるの勝されるにあらずやと、成る程思索的議論よりせば、到底は此の如き一大靈力に歸せしむるにより、その中間物の如き靈氣に頼るの必要なきが如きも、余輩の靈氣を唱ふるは事實にして、現に此の如きもの吾人の體内に存在するを實感するを如何せん、余は實地經驗の結果に依り、その存在を唱へ且つその

性質を説明するのみ、而て更に考察するに、凡そ吾人の脳神経系統の原始状態なるものは、如何にも此の如きものなるべしとの概念生ずるにあらざらば、若し單に進化の大精神を助成する丈けのものならば、難者の説にて或は可ならんも、進化や生存性以外に直覺、感應、情緒等直接間接に靈氣の擔當すべき性質甚だ多し、或は疾病を治癒する性質あることを述べ置きたるが、此性質は生存性として進化の精神に副ひたるものにして、之れ疾病を以て自然淘汰をなすものなりと云はんが、果して然らば左程迄の用意と、能力あらば何故始めより疾病を發せしめずして、之れを救治せざりしや、若し難者の言の如くんば、却て事理を紛糾せしむるものにして、往古以來今日に至るまで、此種問題の茫漠として、その歸趨を得ざるものあるは、蓋し腦神経の機能たる意識作用と、靈氣の擔任たる直覺、感應等の諸作用とを混ざるを以てなりと信ず。

靈氣は元來刺戟に依て發達したる感覺機關となりたれば、その性質甚

だ鋭敏なり、而て刺戟頻繁劇甚なるにより、靈氣之れに應じて發達し、發達するに隨ひ生物(動物)なり、或は有機體と云ふの體制も發育するに隨ひ、靈氣益々刺戟を受けて發達し、遂に神経組織を現出するに至る。刺戟に因て發育せる有機體が刺戟を受けて、感應する場合に發る處の性質は、先づ生存に適順なるべき性質のものたらざるべからず、或は幾多不適順の性質發現したるならんも、斯くては生存に堪へざるを以て、自然遺傳し能はざる結果となりて、惟り生存に都合よき性質のみ遺傳して、此生存性又は生存慾とはなりたるもの、如し。而て有機體即ち生物(動物)はその體制も追々發育進化し、その受る處の刺戟に對して、單純なる靈氣のみにては、之れに應じて働き能はざるゆへ、分業的に神経系統腦中樞を發育せしめて、之に分擔せしむるなり、新規なる刺戟に遭ふこと數ばく、なれば、之れに應じて新規なる機能部又は中樞部をも創造するなり、始めは習慣性や蕃殖性、生存性の如きも、本能的に現はれたるも、追々腦神経が發達するに



隨ひ、意識も加はりて發達し來るなり、意識一び發動するに於ては一層活動的に成るも、意識的作用は靈氣も亦た之を有するを以て、判然と意識の有無を知り能はず、固とより活動の如何は外界刺戟に對する防衛的體制の強弱にも依るべしと雖ども、理性的意識又は靈氣を刺戟し、益々神經質たらしめ、而て益々腦中樞神經系統の組織を複雑ならしむるに至るなり。但し外界の刺戟は感覺器官、知覺神經之れを受る様なるも、靈氣も亦た矢張り之れを受く、否な靈氣は神經が科學的に感受する程度を超越して、感應するなり、之れを直覺と云ふ。感應しては之を腦中樞神經に傳令して之れが對策を講ぜしむるも、事の火急なる場合には自ら本能的に應急手段を取るなり。此場合に於ける靈氣は、哨兵の如く又將校偵察の如し、その本隊の備へ薄弱なるを見ては、之れを中樞機關たる本部に報告して、更に之れに應ずべき特別任務の機關を配置して、之れに當らしむるもの、如し、但し此處將校偵察とは異りて、靈氣自ら特別機關を創造するなり、各

種の中樞神經は即ち之れなり。斯くて腦神經系統の構成は益々複雑にして、益々巧妙なるに至る、蓋し腦神經の發達此の如きに至るは固と刺戟の衝動あるも、その物質を供給構成するの順序大作用に至つては、前已に述べたるが如くなれば、之れ固とより輕視すべきにあらざるなり。

普通一般に稱ふる處の心、若くは精神なるものは、靈氣と腦神經を混合し、その機能も二者の混合作用に外ならざるも、此二者は明かに區別すべきものとす、即ち普通意識と稱するは、大腦神經の機能にして、科學的數理的機械的、經驗的、固定的にして所謂理性なるに對し、靈氣の機能は神秘的、感應的、直覺的、創造的、活動的なり。是等の性質にも又更に詳細なる説明を要すべきなれども、之れを省略して先づ靈氣を論ぜん、靈氣は實に時間空間を超越したる機能を發揮するものなれば、固とより是等の性質に局限せられたるにあらざるも、腦神經系統の機能に對しては、大要右の如く云ふて可ならん、然るに始めにも意識常に靈氣の爲めに動かさるゝの

みならず、靈氣より發育したる腦神經の作用なれば勿論然るべし、靈氣亦意識の爲め動かさるゝことを述べ置きたるが、その最も敏捷感動的なる靈氣の動かさるゝことは、それが性質として正に然るべきこととなす。之れ靈氣の本職なり、故に此二者は常に相資縁して甲が乙に加はり、乙又甲に加はりて發現するなり。之れが即ち心の發動なり、斯くて進化の路程に上りては、如何なる歩調を取るやと云ふに、生物又は動物の體制未だ能く發達せざる間は、靈氣も腦神經も本能的に働くべきも、腦神經が發育して、その機能發達するに隨ひ、靈氣も亦發達して益々その機能靈妙を極むるに至る。但し靈氣本來の性質としては、何れの時代に於てもその性能を發揮し得らるべきものなれば、強ち靈氣の進化發達と云ふ事はあらずる筈なり。唯々その有機體たる動物が、之れを力めざるのみ、即ち靈氣と腦神經が相呼應して、因となり果と成て發達するなり。而し發達の結果靈氣智的の意識界領分に入つて、科學的數理的の機能を發現することあ

るも、然れども之れ固とより直覺的なれば、その性質永久にして確實なるものにはあらず。

曾て米國一農家の子「コルボルン」と云ふものは、六歳未滿の時より學ばずして、一と通りの數學を解し、色々の問題を立るに解して、毫も間違はぬ、依てその父八歳の時彼を倫敦に伴ひ行て、數學の大家「ベイリー」氏の試験を受けたり、その顛末は「ベイリー」氏より詳細報告したることあり。  
(拙著實用倫理にも出づ)

而て意識力高まるに隨ひ、その觀念又は理想も靈氣を介して實現せられ、靈氣自らも外界の刺戟に感動して、又之れに應じたる發育をなさしむるなり。感應又は應化の遺傳之れなり、即ち意識界に發りたる理想、又は觀念は悉く之れを靈氣に傳へ、その實現を圖り益々能く進化向上するなり、但し靈氣は絶へず體內を廻遊して、諸神經諸器官又は全有機體を活潑ならしむること、前已に述べたるが、斯くして又常に靈氣そのものの性質

をも、全有機體に附與するが如し、又は靈氣は自らの性質を遺しつゝ、通過するが如し、時に靈氣以外に小靈氣の存在する如く感ぜらるゝは是れならんか。

感應性又は感じて之れが對策を講ずる性質は、靈氣始めより有す、之れ物に感動する性質の稍々進歩したるものにして、之れが生物殊に動物の高等なるものに至ては、漸次に顯著と成る。已に昆蟲の如きに於ても、保護色、擬態等の事實を挙げたるが、人類に於ては之れが觀念又は理想の現實と云ふべき程度に進めり、進化性には最も必要なる性質にして、唯々外界の刺戟を感ずると云へる一點が、進んで遂に茲に至りたるものなるが、高尚なる進化は之れに原き之れあるが爲め、進化に意義あるが如く觀ぜらるゝなり、蓋し永年月の間、生成發育して生存に適應せるものが繰り返され、遂に生存に適順ならしむと云へる根本性を、固有するに至りしなり、而て陰に陽に生存發育に都合の好き様働き、一方に又外界刺戟に感じて

動くこと云ふ性質と合して、感應性とも成り、遂に理想すれば如何様にも轉化現實すと云ふが如き、實に恐るべき性質とは成れり。今後の人間社會に最も重大にして、又深く注意すべき性質は是れなるが如し。

平常の意識は全く理性なる、叡知に依て動くが如きも、一朝何物か刺戟するあらば、靈氣之れを感受して平穩なる意識も、忽ち靈氣の支配する處となるなり、その程度は刺戟の性質、及その強弱に依て差あり、而てその差は原因たる刺戟あれば、條ちに變化す、之れと同様靈氣も亦意識の爲めに、條ちに變化消長す。之れを要するに平常の意識精神、若くは心なるものは、右二者の混合作用にして、相互に又條ちに強弱消長あれば、その忽條に變化する處の靈氣感情の支配を脱して、須らく理性即ち道理の下に於て動くべきこそ、人の人たる道にあらざるや、何んとなれば、人の萬物の靈長なりと云へるも、畢竟他動物に超越して非常に優れたる理性を有するを以てなり。

意識は冷靜なる理性に依り、事を處せんとするも、少く刺戟あれば靈氣勃興し、無理遣りにも意識を動すことあり、その甚しきに至ては強迫觀念とも成て現はるゝなり、余の知れる人の別莊地に盜狂の農夫ありて近隣に名高き由なるが、自分も數々懲役にも行きて竊盜をなすこと惡事なりと充分承知しながら、一旦その盜心が勃興し來るときは、矢も楯もたまらず、總身むく／＼として身の置處なく、盜まざれば止まざる氣と成て、遂に惡事を行ふとは本人平然として語る處なりと云へり、此友人は又非常に蜘蛛嫌の下婢を知れり、人ありて若し此下婢に對ひ、お前の着物に蜘蛛匂ひ廻はれりと云へば、非常にいやがつて遂に着物を脱て改めざれば止まざるなりと云へり。

催眠術の遊睡状態に於て、右の如き狂態を現はすことは前已に述べたるが、之れは正覺中に已に此の如き狂態を演ずる丈け強く靈氣の支配を受るなり、夫の催眠術の遊睡状態に於て與へられたる暗示は、その人

天稟の本能性の如き状態にて現はれたるは、實に恐るべきにあらずや、その甚しきに至つては、普通の發狂者とも成るべし、以上は靈氣が意識を動すの顯著なる例なり、扱てその反對即ち意識の靈氣を動す場合は最も普通たり、感情情緒の如き皆概ね此の類にして、普通謂ふ處の意識なるものも、常に此靈氣を加味し居るなり、即ち眼に視、耳に聽き理性に據りて、事物の判断をなしつゝある間に、知らず識らずの間に靈氣勃興を喚ひ起すことあるが、又力めて觀念して遂に靈氣の作用を惹き起すなり、その顯著なる適例は、催眠術靜座法に於ける場合に於て見るべし、その催眠せんと企て又は靜座の靈動を試みんと企て、而てその希望通りに遊睡状態に陥り、若くは靈動す、此時は已に意識鎖沈して、惟り靈氣の勃興せし状態なり。此状態に移るには始め甚だ困難なる人も、後には甚だ容易と成る、之れを見ても習慣性の強盛なるを察すべし。催眠術に於ては術者の前に出て、唯々心平靜に若くは無意無心に成りた

る丈けにて直に睡り、若くは唯催眠すと云ふ聲を聞ても、直に陥るなり、又は自己の意識にて催眠す、靜座法に於ては、深呼吸一つなしたらざる内に、已に靈動を始むるなり、而て最初の頃は眼を閉ぢて靈動(首を揺かし手や體を動すを言ふ、人に依てその状態異なれり)するも後には眼を開き、普通の如く談笑しながら靈動するなり、但し無意にして自然に委ねたるのみ、若し之れを止めんと、意を發せば、直に止熄す、而て企て、是迄靈動せるが如き舉動を試みんとするに、到底筋肉等痛みて爲し得べきにあらず。

心又精神作用は、右の如く腦神經と靈氣の混合發現なれば、之れが機能を論ずる心理學に於ては、前記の如き適例はその顯著なるものとして取り扱ひ、且つ研究すべきに却て之を變態現象として顧みざるが如き憾あり、此の如くにして、何れの日か正當なる心理學上の解釋を聞き得べけんや、余輩は今茲に心理學を論ずるにあらざれば、唯一言所感を述べ置くのみ。

神經質とは靈氣の頻次に出勤する人にして、その原因は邪氣の停滯せるを、靈氣來て之れを疏通せんとする趣意に外ならざるが如し、とは曾て述べたる處なるが、兎も角も靈氣頻次に出勤すれば、感覺器官を始め神經系統全體に、甚だ鋭敏となるなり、余は此事實を驗し、且つ人の將さに靈動せんとする時の有様を見て、私かに惟らくその靈妙なる機能を發揮するは、靈氣の上昇して直接、其中樞神經を鋭敏ならしむるにあらずやと、而てその程度に強弱あるは、靈氣の中樞神經に影響(觸る)を及す程度に依るならんと、即ち普通は頭蓋骨の外部に來て、その骨を透徹して刺戟するも、その猛烈なるものに至ては、内部に進入して直接その中樞神經に觸るゝにあらずやと思はるゝなり。蓋し腦の外部なる皮質が、腦中樞の唯一無二の重要部たり得るに至りしも、之れに原くならんか、シドニーギューリツク氏「人類進化論」に云ふ、殊に腦髓の細胞の如きに至りては、奇々妙々で

あつて、他の物に於て見る事の出来ない特別の職分を盡す、即ち脳髓の表面の皮質を構成する細胞が、客觀世界と主觀世界とを連絡させる職分を盡すのであつて、言ば此細胞は心靈が物質世界を觀望する窓である、のみならず心靈をして物質世界に己が意志を働かしめ、或程度まで物質世界を支配せしむる所の器官である、但しこの連絡の働きは、果して如何なるものであるか、又何故に唯皮質のみに此働きがあるか、恐らくは今日に於て之れを解答し得るものはあるまいが云々、(中畧)殊に脳髓の皮質が、物質と靈界とを連絡する機關である所から考へて見ると、どうしても眼に見ゆる細胞の裏面に見へない何かの靈的の物が働いて居ると推察せざるを得ない、云々固とより皮質は、感覺器官と直接に聯絡して居るものでなく、必らず視神經床とか嗅神經叢とか云へる皮下神經原と周邊神經原との媒介を経て、感覺器官より來る感覺刺激を受容するなり。之れと同一皮質と隨意筋との間も、決して直接の聯絡をなし居るものでなく、兩者は

皮質下神經原を介して、始めて交通するものなるにより、その重要機關が表面なる皮質に存するやも知れざるも、ギューリック氏の如き疑念を懷くに於ては、余輩の假定説が如何にもその理あるが如し。即ち何等の聯絡なき靈氣なる刺激が、表面より來るゆへ、その上面なる皮質が、重要部たる所以ならんと云ふ之れなり。

或は生物一般自然の進化は已に停止して、惟り人間のみ進歩發展しつつありと云ふものあり、余も全然進化の停止せりとは信じ能はざるも、然れども太古以來進化の影響は漸次に衰へて、今日は餘程薄弱と成りたる中に、人間は惟り進化すべき望みありと信じ居るものなり、若し否らずとせば、今後も亦た新たに人類の生出を見るべき筈なるが、今後人類と成るべき見込ある猿類若くは動物もなければ、此事到底期し難きが如し、而て余の往日に比して今日進化の影響衰へたりと斷言するは固と外界刺激物の減退せりと信じたるに原くものにして、余は余の感覺器官に觸る範

圍内に於て宇宙大自然界の主要なる刺戟は、我が太陽の光熱并に之れと同一源なりと信ぜらるゝ、地熱なりと信ず、而て熱の蒸温が生物の發育に必要なるは勿論なるが、惟り適良なる高温度のみならずその冷却せる場合即ち冷温その變化をなす間に於ても亦刺戟を感ずること敏ならざるべからず、殊に動物と成て神経系統の發生したる以來の天變地異は、最も深甚の影響を動物に與へて、進化向上に資したるが如し。

自然力の偉大にして、人間を始め諸動物殊に家畜類の神経に深甚の影響を及すことは櫻島爆震の一例を以て察すべきなり、詳言すれば爆震以來牛馬始め犬猫の如き家畜も神経質と成りて、人に慣れ易くして性伶俐となりたるが如し、犬猫の仔に就て察するにその怯懦神経質なるもの成長して伶俐なるが如し人も亦同じ猶ほ思ひ合はする一説は、人類の始めて出生したる地方なるが、それは亞非利加の東方、印度の南方、濠洲の西方に、大陸ありて此處に人類創出せしが今は此陸地陥没して

大洋と成れり、人類の祖先たるべき獸類の今に至るまで不明なるも之れによるならんかと云へり、天變地異が進化に大影響を來すものとせば大陸の海中に陥没するが如き地方には、その所謂天變地異なるもの頻發したるにあらずや、

太古に於ては地熱の蒸温も昂くして、その所謂天變地異なるもの甚だ頻繁なりしに、今日に至ては地熱漸次に減退して、その天變地異なる現象も大に衰へたるゆへ、彼是の點に於て進化を促すべき自然の刺戟物は、大に減退したるものと斷定せざるを得ず、之れ他動物の進化大に衰へたる所以なり、然るに人類は地球が未だ斯かる狀況に至らざる前に於て、早く既に直立の姿勢を執り得るに至るまで進化したるを以て、縦し物質的の體軀は發達せざるも、その腦力は滋々發達すべき理由を有す、但し人は理性を有して自然力の外に人爲を以て體軀の發達を圖るべければ、心身の進化は共に望みなきにあらざるなり、唯々之れを實現すると否とは吾人

の覺悟如何に依るのみ、而して更に進化の順序より觀ずるときは、理性は靈氣より生出し、漸次に進歩發達して複雑なる刺戟を確實に感應せしめんが爲め、此高尚なる人間に、特別に創造發達せられたるものなれば、人は成る丈け此理性に依て行動するこそ人の人たる所以にして、又天理ならずやと思はるゝなり。

## 餘論

余は已に本論に於て余の言はんと欲したる大要旨は悉したりと雖ども、猶ほ種々の點に於て自ら説明に不満足を感じ居れば、茲に之れを補充するの必要を感じ、故に多少重複する處あらんも、蛇足を添へて以て一二不足を補はんと欲す。

一 余は余の研究法を自ら内觀法なりと稱するも、この名稱果して當を得たるものなるや否やは知り能はざるなり、若かも深呼吸靜座法等を行

ふものが内觀と唱ふるよりは、余の研究法こそ内觀法にあらずやと思惟し、斯くは稱したるが、此名稱は白隱禪師等の唱へたる處にして、佛法に於て之れを行ひ、殊に釋尊や達磨の如き難行苦行も之れと同一法ならんとは前著書に述べ置きたり、此法は一見して直覺的の如く察せらるべきも、余に於ては決して直覺にあらずと思惟するものにして、唯々感覺器官を敏捷(神經質)にして、その鋭敏なる神經に資て自個體内の機微を窺ふに過ぎざるのみ、察するに誰人も自個の神經が自體の事(例へば痛痒の如き)を感覺し能ふことは能く知る事實なるが、その感覺即ち神經を一層鋭敏ならしめ得ることも、亦た能く人の經驗する處なり、左らばその敏捷なる神經は自個體内の事を一層精密に感知し得ることは當然の結果にあらずや、余が所謂内觀法は即ち是にして過敏なる神經を以て自體を精察するに過ぎざるのみ、即ち普通一般が平常に感知する處のものを、今少く敏捷ならしむるのみにて決して、其間に不可思議も神秘も存在せざるなり、若



し之れをしも奇妙なりとせば、先づ平常に於ける感覺器官の奇妙を怪訝せざるべからず、要するに内観法は科學研究と直覺との中間に位すべきものにして、實驗的直覺とも稱すべきもの又は直覺の初步とも稱すべし、然れども余は決して直覺にはあらずして、實驗の結果なりと主張せざるを得ず、蓋し普通所謂直覺なるものは此種の現象をも指稱するならんも、余は學究者として前陳の如き所信を抱懷して立つものなり。

一 哲學は科學の盡る處より起るとは佛國哲學者の言なるが、今日の如き哲學と科學が若かく密接して併立し得るや、余は疑ひなき能はざるなり、若かも余に於ては二者若し果して接續するものとせば、寧ろ其接續點に於ては彼是相重複し得るものと信ず、例之へば科學的に幾分哲學範圍内の現象を説明し、又哲學に依て經驗科學界の事相を論證し得べきものと信ず、斯くて科學と哲學が融和照合して遂に聯結すべきにあらずや、然るに二者の研究非常に進歩したりと云へる今日に於て、猶ほ未だ満足の

結果を收め能はざるは、二者の研究法が餘りに相反する所以にあらずや、今若し此二者の中間に内観的研究法を持ち込むに於ては、彼是の聯續容易ならん、而て哲學科學共に必らずや長足の進歩を致すべし、本書の生物學即ち科學的にして又哲學的なるもの之れに原く。

一 内観法に於ける研究説明の方法は、今日の經驗科學界に於て採用する歸納法とは全くその趣を異にして、一見演繹的なるが如きも、余に於ては決して若かく信ぜざる旨は、本書卷首に於て辯解せし處なり、之れ余が自ら實驗に徴したる内證より立論するを以て、余に於ては全く歸納法と同一なりと信ずる次第なるが、他が余と同様の經驗を遂げ能はざるを以て、余は事實を擧げて之れが證明を試みるゆへ、演繹的なりと思惟することとは無理ならざる次第なり、此場合に於ても亦た内観法は右二者の中間に位すべきものにして斯くて、二者の聯結を完ふし得るのみならず時にその接續點に於ては相重複すべきものなりと信ず。

一 余の内観し得たる二氣中邪氣の大部分は、必らず物質的に研究し得べきものに屬し、靈氣の性質は概ね科學的に研究し能はざるものなれども、猶ほ幾部分は物質的に驗證し能ふべきものにあらずやと思はるゝ、點なきにあらず、此の如き状態に在るものを容易に證驗し得ること即ち内観法の特質なりと信ず、然れどもその必らず物質的に研究されべきものなりと云へる邪氣さへ、今日の科學が未だ現實に證驗し能はざるを遺憾とす、余の研究が科學と哲學と相混同するが如きも、前陳の如き事情性質あるに依る、而て内観即ち主観的に研究し得たる處のものを、更に科學的即ち客観的に證驗すべしと云ひながら、未だその希望を達し能はざるは、科學界の事情右の如くなるに依るなり、人生に直接の大關係を有する病的生理の研究さへ未だその真相を悉さざること、前著述にも陳辯したるが如し、余は順く病理研究所の設立を切望して止まざるものなり。

内観的人類進化説終

大正三年十二月二十日印刷

大正三年十二月廿五日發行

定價金五拾錢



内観的人類進化説

著作者 玉 利 喜 造  
 發行者 東京市牛込區白銀町二十番地 合資 育 英 書 院  
 代表者 目 黑 甚 七  
 印刷者 東京市京橋區弓町二十五番地 高 橋 郁

三協印刷株式會社發行

發行所

東京市牛込區白銀町廿番地 合資 育英書院  
 振替口座(東京)三四二番

發賣所

東京市京橋區南傳馬町二丁目 目黑書店  
 振替口座(東京)二八〇九番

327  
690

終

